

記録しておきたい記憶

Memory that records

Le japonais de la couleur des cheveux qui sont idiot (日本語で「アホな髪の色日本人」)

もう今から13年前の話ですね。

13年前の12月にフランスのパリに一週間ほど（実際には5日間ぐらい）旅行することになりました。

当時、僕はデザイン系の専門学校生でしてこの学校は「研修」という名目で学年全体でパリに行く、というのが毎年の恒例行事でした。

旅費は授業料からの積み立てでしたが、向こうでの生活費とか土産やら美術館の入場料、買い物や移動は全部実費（当然ですけどね）だし、あんまりズタボロの服でも行けないし、カメラとかも買わないといけない。

苦学生（自分で言うなって感じですが。一応学費は学資ローンで自己負担）の僕にはとんでもなく痛い出費でしたが、何とか工面して5万程は小遣いとして持っていくことに成功。さて、小遣いは確保したしカメラも「写るんです」を2コ程購入（実は全然足りない）。次は身なりをどうしようか、と。

で、前々からやりたかった「白髪」にチャレンジしてみることに(^_^;)

これはその当時「坂本教授（坂本龍一さん）」が白髪にされてまして「カッコイイ」と思いやってみたくて仕方がなかったんすよね。ところが僕がバイトしてたのはお堅い「警備会社」です。ごまかし程度で部分的に茶色にするぐらいならなんとか出来たけど白髪にするとなるととんでもない。クビっすよクビ。

しかし、今回の旅行で長期の「バイト入れない期間」が長期（といっても10日程度）出来たわけです、これはやるしかない、と思い立って近所の床屋へ。

床屋のオヤジさんも「白かあ～白はやったことないからなあ～」と困惑顔（そりゃあんな田舎でそんなことやるやつあいねえ）。

一先ず試しに海外性の強力なブリーチで何回かに分けて脱色してみるか、ということになりました。

僕の髪は色素が強い、というか真っ黒でなかなか色が抜けないそうでした、一回目は「茶色」になりました。

翌日もう一回やってみたところ「金色」になりました。キレイな金色になって「いい感じじゃん、これにしといたら」と言われて、僕もそう思ったんですが、目標は「白」ですから、引き続きブリーチして色を抜くことに。

そうして出来上がった頭がこの色。



そう「象牙色」。

日本人は黄色人種なんで黄色っぽくなるらしいんですね(^_^;)

ホントは青色を入れると「真っ白」に見えるらしいんですが、そんなこと知らなかったんで…。

髪の毛一本一本は透明に近いんですけど、頭皮の色とあいまってこんな色に…。

「うわぁ～・・・（失敗したぁ）」と感じながらも床屋の親父責めるわけにもいかず、とにかくにも、この頭でフランスはパリに行くことになりました…。

Il est transporté par avion à Paris pour les ivoire-blanches 16 heures. (象牙色、16時間かけてパリへ空輸される。)

さて、そんな「象牙色」の頭引っさげて、名古屋空港へと来てしまいました。

連れは爆笑、先生はビックリ、そんな仲良くない女の子たちは引いてる（事実マイナスな「きゃあーっ」という悲鳴は聞きました）、知らないヤツだけど同じ学校の連中は冷ややかな視線で「アイツ、バカじゃねえの？」と物語ってます。

やっちゃったもんはしょうがない。僕はそんな周りの反応を受け入れました。だって自分でもそう思うもん（笑）

そして飛行機に乗ります。実はこのときが人生初の飛行機。緊張します。

機内に乗り込み、指定された席に座ります。学校全体で乗り込んでるので結構貸切状態。みんな友人やら同じ学校の仲間が隣にいます。僕は一番後ろで窓側の席。横にはまだ誰もいません。

「誰が来るんだろうな～？女の子だったらいいな～」なんて考えてました、けど一向に誰も来ない、「ん？空席なのかな？」

僕の身長は183cm、エコノミークラスは結構狭くて辛いんで、空席なら空席でラッキーと思ってたところへ、すごい太った黒人のオバサンが僕の視界に・・・

僕の横に座りました（泣）狭い。

しかも学校のツレが座ってる区域と隔離されてる。これで16時間はないぞ!! 確かに「女の子」だけども!!

結局、ちょっとの間はきちんと座ってたんですが、我慢出来なくて、席移動（この辺、落ち着きないのは2歳の息子と変わらない）。

しかも初めての飛行機だもんで一層落ち着かない。窓からの風景写真撮ったりして移動しまくり。行きの飛行機の中で「写るんです」1本使ってしまった、計画性ゼロ。

他にも落ち着きのない連中がいて、フラフラしてるので、空いた席に移動したり、グルグル回る。食事の時間になって席に戻るけど、食い終わったらすぐに移動。オバチャンごめんなさい。

オバチャンも「ナニコノニホンジン、ヘンナイロノアタマダシ、ウザッタイ」と思ってたんだろなあ。

当時好きだったコの席の近くにいたりしてちょっかいかけたり、やってることは小学生と変わらない。ん～男はいつまでたっても少年の心を忘れないな（迷惑なことこの上ない）。

そんな感じで飛行機の中で過ごしてドイツ経由でフランスはパリへ到着。ホテル着いたときは真夜中で、すごく疲れてたので部屋に入ったらすぐ爆睡です。



Même je suis pauvre! (俺だって貧乏だ)

翌日、食堂に集まりみんなで朝食。

さすが、フランス。朝食はフランスパンでした（固いつーの）

この日は団体行動で各学部、決められたコースを回るだけ。ヨーロッパは比較的曇り空が多いというのに、この日は珍しく快晴。いい天気だ。

エッフェル塔を見物、近くの広場ではパーフォーマーの方がいて楽しそうな場所でした。



そしてその広場にあるテキヤのオネーチャンは僕を見て爆笑です。

自分の髪の毛を掴んで「カラー？」と。

ええ、もう好きなように笑ってください、指さしてください。珍しいですよ、おかしいですよ。

夜は毎年必ずその学生の誰かが行く、というレストランへ。何でも学校の名前がついた「定食」があるとのこと。同じクラスの仲間とそこへ行って、金がないので僕は安めの食事、連れはその定食を頼みました。

で、テーブルに届けられた料理はみそラーメンという名前がついた「みそそうめん」。

とっても不味そう・・・見た目どおり不味かったそうです。

しかもソイツ、その日の夜腹壊しました。

翌日からは昨夜のメンバーで、丁度行きたい場所が重なってたんで、行ってみることに。



場所はモンマルトルの丘。結構有名で観光地にもなってます（実際は墓地なのかな？ようわからん）。

大きい教会がありまして、その近くにですね、目的地である「ダリ美術館」があります。

ダリは昔から結構好きでして、風景画を見て「キレイだなあ」とかの感覚はなくて、「この絵面白い」とか「このオッサン、ユニークだなあ」というところに惹かれるんすよね（ダリファンの方、こんな表現ですいません）。

結構長い上り坂になってまして（丘っていうぐらいだからな）、その坂には何人もの「似顔絵描き」がいるんですが、観光客に声をかけて、それぞれ「営業活動」しています。

僕らはそんな彼らには目もくれず坂を上り続け、一先ず坂の上の広場に到着。そこでふと立ち止まって景色を見ていたら、エラくしつこく営業を仕掛けてくる「似顔絵描きのオジサン」がいました。

しつこいのと、「ワタシ、ウタマロ」とか他に観光客から教えてもらったであろう適当な日本語が笑えてきたので、「じゃあ描いてよ」ということに。

立ち止まって描いてもらっていると、ふと横目にもう一人、僕を描いてるオジサンが見えます。

「勝手に描いてるのかな？まァほかっときゃいいか」なんて考えてそのままにしておきました。

15分ぐらいして、「ウタマロ」が僕を描きあげました。どれどれ・・・



似てない!!

もんのすごい美少年になってるんですよ、目もキラキラしてるし。

ちょっと待てあんたプロだろ?ご機嫌取りで「カッコよく描けばいい」なんて思ってんじゃないぞ、とちょっとイラっとしてると、

「ウタマロ」は笑顔で「200フランダサイ」と。

確かこの時は200フラン=約20000円だったかな?

おい、ちょっと待て!! それは高くないか?

前日にガイドさんから「日本人はぼったくられるから気をつけて」といった言葉が僕の頭の中をよぎります。

というか、似顔絵頼んで、全然似てない似顔絵描かれて、何でお金払わなきゃいけない?

「全然似てないじゃん!! カッコよく描けば気前よく金払うと思ったら大間違いだぞ!!」と僕は文句をつけます。

「ワタシタチピンボー、オカネ、オカネ」と一歩も引かない「ウタマロ」。

そこへさっき横目に映ったオジサン近づいてくる。

「仲裁してくれるのかな?」と思いきや、

「200フランダサーイ」

・・・ブルータス、お前もか。

こらこら、アンタには似顔絵頼んでないだろが。

しかし、こっちのオジサン（仮にこのオッサンを「ブルータス」としときます）の絵はデフォルメされてて面白い、

ちょっと欲しい。



「アンタには頼んでないやろ!!勝手にアンタが描いただけやん」とその要求を撥ね付けます。

それを受けてブルータスは「オカネナイネ、ピンボーピンボー」の一点張り。クッ「ブルータス」も手ごわい。

「ウタマロ」も「ブルータス」も「ハラエ・ピンボー」の一点張り。

埒あかねえ・・・誰だよこんな日本語教えたの。

僕もイライラとしてきて声を荒げます

「オメーのは全く似てねえじゃねえか!! そんなものに200フランも払えるか!!

んで、テメーは勝手に描いただけだろが!! 俺は頼んでねーぞ、何で金払わなアカンのや!!」

(※ほんとにこの勢いでしゃべってます)

それでも一歩も引かないウタマロ&ブルータス。

「ワタシタチトテモピンボーネ」・・・遂にプチンときました。

「うるせー!! 俺だって貧乏だ!!

今回の旅行だって5万しかないんだよ!!

学費払うのにこっちも必死なんだ、アルバイトしまくりでギリギリなんだよ!!」

と、必死です。(※ここで注意。日本語とカタコトの日本語でしゃべってますけどここはフランスです。

フランスのパリ郊外「モンマルトルの丘」の中心で象牙色の頭の色をした日本人が「俺だって貧乏だ」と叫んでいます。滑稽なことこの上ない)。

まあ、向こうからしたら知ったこっちゃないですよ。

言葉は通じてないようですが、感情は言葉の壁を越えたようです、値下げ交渉始まりました。

2枚で400フランに始まり、350・・・300・・・250・・・200・・・金額を提示されるたびに僕は「高い!!」とはねつけます（つうか、何であくまで日本語?）

B4サイズぐらいの画用紙に鉛筆で描いただけですからね。更にぼったくり、というイメージがあるのでそんな簡単には首振れません。

しかも、パリでの食費やら土産やら買う金残さないといけないし、全部使ったら日本戻ってから無一文なんで、出来るだけ金残さないといけない。

遂に2枚で50フランまで下がりました。1枚2500円。

このぐらいなら払ってもいいか、と思えたので「OK」と頷き、二人に50フラン渡しました。

金を払ってふと我に返ると背後や周りに人の気配がします。

振り返ると僕は絵描き仲間らにびっちり逃げ場なく囲まれてました・・・（怖）

モメてる仲間を助けるべく集まったようですね。

中には僕と同じぐらいの身長の間もいて、僕を睨みつけています。

とりあえずお金を払ったので、事なきを得ましたが、いやまさか仲間が集まってくるとは・・・。

で、それに対し僕の仲間はというと、囲まれてる僕を見て指さして腹抱えて笑ってたようです。

ご丁寧に囲まれてる僕をカメラにまで収めて。助けるよテメー!!（後日写真見せられた）

そして、金を受け取ったウタマロ&ブルータスは僕に「ケチ」と言い残し去っていきました（だから誰だよ、そんな言葉教える輩は!!）。

いや、しかし今思うと恥ずかしいことしてましたね。若気の至りとはいえ、反省しております（けど、200フランは高すぎでしょ?）。

Plongeon des forces armé (軍隊突入)

さて、モンマルトルで一暴れしてその後は何事もなくダリ美術館を周り、ホテル戻り、何故か「騒動」が耳に入ってたらし先生から怒られ、部屋に戻りました。

明日はそれぞれが違うメンバーで行動するようで、僕は一緒に動くツレもおらず、途方に暮れていました（昔からツレいないタイプです。）

翌日、ホテルに一人いても勿体ないし、ヒマなんで一人で動いてみることに。

目的地はパリの南方向の地下鉄終点。確か「ポートドオルレアン」だったかな（'?'）

何故、そこへ行こうと思ったかという、当時「ジャンヌ・ダルク」にハマってまして。

んで生地とか銅像だとか、ゆかりのある物や場所に行ってみたかったんすよね。

で、確か「オルレアンの少女」という肩書と南フランスの生まれだった気がしたので地下鉄路線図見て、南の終点の駅の名前が「ポート・ド・オルレアン」と書いてある（ように読めた）ので、そこを目指すことに。

ホテルの近くの駅から路線図とその路線の色を確認して切符を買います。けど現地の人はみんな改札飛び越えてくんですよね。どうやらそれが当たり前ようです。

地下鉄に一人で乗ってみると意外と普通。

日本人一人だと囲まれたりするのかななんて思ってたけど（前日が前日だけに）、何のこたない、名古屋の地下鉄と変わらない。どのみち知らない人がたくさんいるだけ。それに出来るだけ「現地に住んでる日本人」っぽくしたほうが無難かななんて。

目的地は結構遠くて、時間かかりそうだったんで、お気に入りの歴史小説をカバンから出して「乗り換えしたからどのみち終点まで行くだけ」と思い、読み耽っておりました。

いくつかの駅を過ぎ、半分ぐらいまで来た時にエライ電車が遅くなったんすよね。

「駅が近いのかな？」とも思ったけど、その割に駅に着かない。

「ま、信号かなんかかな（←バカ）」と思い、小説の世界に戻ります。

更に少しすると車内アナウンスが流れましたがフランス語なんでさっぱりわからない、その後ゆっくりと駅に到着しました。

乗客はみんな降りてしまい、遂に客は僕一人になりました。

「みんなここで降りる人だったんだなあ（←更にバカ）」と小説を読んでいたら

電車内に軍隊突入

してきたんですよ。

意味がわかりません

ワケがわかりません

銃口向けられて、銃で僕に車両から降りるよう促します。

一先ず小説をカバンにしまって、車両から降ります。

「えっ？はっ？」と何が起きてるのかさっぱり判らず、ホームにいたら、更に怒鳴りたてられます。どうやら「上に行け」、と言われてるもよう。

とりつく島もないので、仕方なく階段上って地上へ。ここはどこだ(')?

地下鉄の駅名を路線図と照らし合わせると目的地よりかなり手前（5つぐらいかな）。「んー？（何で下されたんだろう？）意味がわからん。」

落ち着いてきたので少し周りを歩いてみて再び地下鉄の駅に戻ろうとするとそこには侵入禁止のテープが、ホームへと降りる階段入口に「×」の字に貼ってあります。

「あー刑事ドラマで見たことあるわ～いや～ホントに使ってんだな～」などと状況と空気が全く読めてない僕がいました。（しまった写真撮っておけばよかった）

あとで判ったことなんですけどどうやら「爆破テロ」の予告があったようで、それにものすごいタイミングで僕が居合わせた、ということです。

僕らがフランス入る一週間前に実際爆破テロあったようですしね。この時はいたずらだったのか、爆発を未然に防いだのかわかんないですけど何も起きませんでした。

テロが起きなかったのは幸いですが、僕にとっては大問題です。

今回の旅行はかなり「金なし」旅行なので、地図、ガイドブック、辞書、そんなものは一切持ち合わせておりません。しかも僕はかなりの方向音痴（岡崎向かおうとして四日市向かうぐらい）です。

昨日までは友人がガイドなり辞書なり地図なり持ってたから何とかあったけど、今日は一人……。

Un grand nombre d'enfants (子だくさん)

さあ、地図もない、辞書もない、ガイドもない、お金もない、でも夢と目標だけはある僕。
ちょっとカッコよく言ってみました、なんのこたあない

「途方に暮れる無鉄砲なバカ」です。

地下鉄を追い出され、「う～ん・・・行くべきか戻るべきか。」

時間は午前10時、ホテル戻っても誰もいない、それにジャンヌ・ダルクのゆかりの地（と思われる場所）にも行きたい。

「え～と、地下鉄の駅5つ分だろ？」

金山→（当時の僕が一番よく利用してたのは名城線金山駅）別院→上前津→矢場町→栄・・・金山から栄間か。バイト帰りに歩いたこともあるし、距離的には問題ないだろ。行くか。」

僕は歩いて目的地へ向かうことにしました。

と、歩くにもどっち方向か全くわからない。

日本では誰でもいいから通行人捕まえて道聞くんだけど、昨日の騒動でちょっと弱気な僕。

それに一人という心細さ（←自分で一人で動くと決めたクセに）から考えることはどんどんネガティブな方向へ（笑）

「男にしても女にしても若い連中に道聞くとどっか連れてかれるかもしれんなあ・・・、となると老人か・・・でもジイサンも侮れないからなあ・・・。

よっしゃバアサンならどっか連れてかれたとしてもケンカ勝てる（←とても空手15年やってた人間の考えることじゃない）」

と、ということで適当に大通りで人が多そうな方向（テキトーに歩いてるだけ）向かって歩き出します。途中、大きな公園とかあって何気なしに写真撮影。

まだ気持ちに余裕があります。

こんな写真撮ってどうすんだ、とも思ったんですけど何か写真とらなきゃ、という変な義務感から撮ってしまいました。



トコトコ歩いて、「何かさっきここ通ったぞ？（たぶんデジャヴだよ）」というのを何回か繰り返し、大通りへ。

実はそこへ至る前にも何人かの人とはすれ違ったんですけど怖くて声かけられなかったんですよ

で、大通りに出て、意を決して道歩いてるおばあさんに声をかけます。

「すいませ〜ん」（←頑なに日本語です）

「???」もちろん通じないので、仕方なく数少なく知っている英単語の中から絞り出し「Excuse me?」と声をかけなおしました。（英語は高校3年間“2”で追試も受けてるし、大学受験も4段階マークシート方式200点満点中46点で落ちてます）

おばあさん相変わらず「???」です。あ、そうかフランスはフランス語がメインで英語は「外国語」になるのか。今更そんなことに気づく僕。

でも声かけちゃったし、そんなことおかまいなしにジェスチャーで押し通す。

地下鉄路線図を出して、行きたい駅の場所を指でさして（どのみち英語伝わらないんだったら日本語でも一緒だよな）「ここ行きたいんですけど〜」と聞いてみる。

おばあさん、なにやら説明してくれてるんだけどごめん、意味がわからん。

熱心に説明してくれてるんだけどさっぱり意味がわからない。だんだん面倒くさくなってきた（昔からそうなんです。道聞いて、目的地までの道順が覚えきれなくなると、「あ、いいや」って感じで投げちゃう）。

我ながら失礼極まりない（反省しております）。

一通り説明してもらって、とりあえず最初に指さされた方へ歩く。

交差点に出た。もうわからない。

記憶を辿り、交差点渡らずに右へ折れてみる・・・。

トコトコ歩いて、「何かさっきここ通ったぞ?（たぶんデジャヴだよ）」というのを何回か繰り返し、大通りへ（文章も多分デジャヴです）。

これを3回ぐらい繰り返して、「もう一回同じ場所に出たら、また人に聞こう」と思ってたら今度は違う道に出た。

意識してさっきと同じ道を通ったつもりだったんだけど・・・なぜ (><?)

ま、いいや。やっと迷路から脱出できたんだから（←迷路でも何でもなく勝手に迷ってたのは僕）などと思いつつ、「今頃みんな楽しく回ってんだろな〜、いいなあ。」などつつぶやきながら歩き続ける。

「でも、今回こんな経験して、一人で回ってるのは俺だけだろうな。寧ろ、俺は貴重な体験してるんだよ、これは。」

などと負け惜しみに近い（ムリヤリ）前向きなことも考えたり（←ただ単にグループ分けからあぶれただけだろうが）して、そろそろまた人に道を聞こうかなと思った。

丁度、前から犬の散歩中らしい60代後半ぐらいの「貴婦人（これがパリジェンヌってやつね）」が歩いてきた。

すごい上品そうで、人良さそう。

「この人、昔はすごいキレイだったんだろなあ〜（←メチャメチャ失礼なヤツ）」などと思いつつながら「Excuse me?」と声をかけてみる（今度はいきなり英語）。すると返事が返ってきた。

「おっ英語わかるの?」と嬉しくなり（コミュニケーションの真髄ですよ、これって。通じるというのは嬉しいし大事なこと）、続いて、「Can You Speak English?」と聞いてみる。

おばあさん指で小さく隙間を作り「Little」とジェスチャー。やった英語わかるらしい!!

さっきと同じように路線図出して説明してみる。

同じように指で方向を指し示してくれてるんだけど、やっぱり覚えられない。

僕自身は意識してなかったけど相当困った雰囲気出してたんでしょね。

おばあさん、いきなりスタスタ歩き出したと思ったら後ろにいる僕に振り返りステキな笑顔を見せて待ってくれてる。

「お、？付いてこいつってこと？」

おばあさん、犬の散歩ついでに困ってた象牙色の珍獣も散歩に連れてくことになりました。

片言の英語で会話しながら10分ぐらいかなあ一緒に歩いてました。どうやら東京には行ったことがあるらしく「you're TOKYO?」と聞かれたので「No,NAGOYA」と答えると「I don't Know」と答えられました。

そうだよ、名古屋なんて知らないよね。

交差点にぶつかり、どうやらここでお別れの様です。僕はこのまま横断歩道を渡ってまっすぐ行けばいいらしく、おばあさんは右へ曲がるみたい。

そして別れ際、「このまままっすぐだけど、いい？まっすぐ行き過ぎてもダメよ。ちょっと危ない地域になっちゃうから気をつけてね」（と、多分言ってた気がする）と僕に言い残し別れました。

そして横断歩道が赤信号だったので僕は信号が変わるのをまっています。

その横断歩道には小さな子供が二人信号待ちしてました。小学生低学年ぐらいかな。二人とも女の子です。

何故か手に「窓拭き掃除グッズ（バケツとあのT字のゴムついたヤツ）」を持ってたのが印象的でした。

人を横目で見ながらヒソヒソ話したりって意外と言われてる本人は気づくじゃないですか。子供たちが僕の方を見て、何かヒソヒソ話してます。

「こいつ何者？」とか言ってんだろなあ、とか考えてたら信号が変わりました。

とにかく目的地行きたいのと、その子供たちから離れたくてスタスタ渡ります。

すると後ろからさっきの子供二人が奇声あげながら僕めがけて走ってくるんすよ。雰囲気的には「遊んで遊んで」モード。

子供って「変わったもの」好きじゃないですか。好奇心旺盛だし。僕の風貌はそんな彼女たちの好奇心をくすぐったらしく、服引っ張って「ねえ～遊んでよ～」攻撃です。

僕はどうしていいかわからず、とりあえず子供たちを振り払い、ダッシュで逃げました。う～んオトナゲナイ。

「お兄ちゃん行くところあって急いでるから、また今度ね（今度っていつだ?）」と一応は断りはいれましたけど。

子供たちから逃げたはいいが、ますます道がわからない。

ふと気づくとどうやらそこは閑静な住宅街。小学校があったのを覚えてます。

そういや今日は平日。さっきの子たち学校は？何で掃除道具？

もう完全に道に迷いました（というか地下鉄降りた時点で迷子だったけど）。

それでもブラブラ歩きながらふと腕時計で時間を見ると既に13時過ぎ。もう3時間も歩き続けてます（若い!!←いや、そうでなくて）。

ヨーロッパって古い街並みが残ってる場所だと中世の頃の石畳がそのままなんですよ。しかもデコボコでまともに歩くのが大変。で、僕はブーツだったんですよ。しかもヒールのあるかかと

が木製のブーツ。

だからもう足が痛くて痛くて。

歩き疲れちゃって立ち止まりました。そして我に返りました。

自分が迷子でホテルの電話番号もわからない、パスポートもホテルに置いたまま、自分がどこにいるのか場所も方向も方角もすべてわからない、というこの状況の危険さに、今頃気づきました。

もう一気にネガティブ感情がMAX。

今はまだ明るいからいいけど暗くなったら・・・とか考えると「今から目的地向かってすぐ着いたとしても、すぐ帰らないといけない。それにタクシーは怖くて乗れないし（ぼったくられたり、どっか連れてかれそうだから←すごい偏見）」などと考えてたら答えが出ました

「そうだ、帰ろう」と。

足も限界、これ以上歩いても辿りつける気がしない。

「帰宅モード」に切り替え、頭の中をジャンヌ・ダルクから「一番近い地下鉄の駅へ変更」しました。

さあ、今度は地下鉄探して歩き回ります。グルグル・・・トコトコ・・・足痛いのと悔しいのと不安との闘いです。

こういう時って日本大使館とか電話してみるといいのかなあ、とか俺一人フランス置き去りになるのかなあ（←そんなことあるわけがないんだけど）とか色々頭に浮かんでくるけど、全部マイナス思考ばかり。

それから2時間ぐらい歩きました。計5時間も歩いてます。

昼飯も食ってないので腹減りすぎて目眩までしてきます。疲労も限界、俺、一体どうなるんだろう・・・と思ってたら、路傍に看板が。

なんと、この地域の地図看板!!これはラッキー!!早速地図と今、自分がいる場所を確認し、地図と地形を確認します。

そして、地図看板内に「地下鉄」マークを発見!!

「やった、帰れる!!」

僕は嬉しくてたまらなくて、今度は道に迷わないようにしっかり地図を頭に叩き込んで（大通りまで直進して左折するだけだったんだけどね）、地下鉄目指し、最後の力を振り絞ります。

5時間よく歩いたなあ～人間の歩く速度が時速4kmというから、俺20kmも歩いたのか・・・などとさっきまで全然余裕なかったくせに、こんなどーでもいい計算などをしつつ、そして駅発見!!
神は俺を見捨てなかった!!

おお、神様ありがとう!!

地下鉄の駅だ!!

ありがとう、本当にありがとう。

もう泣きそうでした。さっそく駅名確認して、路線図と路線の色を確認、ホテルに一番近い駅までの切符を買って、改札口を通ります。

帰れる、帰れる、帰れる、帰れる・・・頭の中いっぱいです。限界だったんでしょうね、ホント。

改札口を抜け、ホームまでの階段を下ります。すると・・・

あ—————っ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

と、ホームいっぱいに響き渡る声で僕を指さす子供がいます。そう、さっきの女の子たち。

しかも今度は2人じゃなくて20人ぐらいいる。

フリーズしました、僕。

若しくは「THE WORLD」かけられました。

頭の中、真っ白です。

その子は後ろにいる仲間に声かけて何やら説明してます。

「ホラ、さっき言った珍獣だよ。ね、ウソじゃなかったでしょ。みんなで遊んでもらおうよ」(← 多分こんな感じでしゃべってる)

その子が先頭になり階段を僕めがけて駆け上がってきます。

それに釣られて、他の子供たちも奇声を上げながらいっせいに僕めがけて駆け上がってきます。想像してみてください、20人ぐらいの子供が一斉に僕めがけて階段駆け上がってくる「地獄絵図」。

しかもブーツで5時間歩いてメシ食わず、もうフラフラ。やっとの思いで、地下鉄見つけて、今までの緊張感や集中力が切れて、解放感いっぱいタイミングで、このハプニング。

駆け上がってくるのを見て、我に返る。

しかし、子供が何か見つけた時は万国共通のリアクションだな、と思いつつ逃げます。しかし、もう足はグダグダ。逃げ切れない、観念した僕は逆に、その「群れ」に向かっていきました。もう余裕なんて全くありません。

子供たちに囲まれて(昨日と いい 今日と いい よく 囲まれるなあ)服を引っ張る子、足にしがみつく子、振り払い、力づくで引き剥がし、電車に乗り込みます(そういやこのときにはテロの警戒解除されてたんすよね)。

そして電車に乗り込むと子供たちは諦めたようで、電車の中までは追ってきませんでした。

「勝った・・・」まるで戦場から生還した兵士のように。

車両の中から子供たちに「バイバイ」と手を振り、車両は動き始めました。

ホテルについたのは16時過ぎ。部屋に戻るとメイドさんたちがベッドメイキングをやってくれました。

もう寝たかったので僕はチップを渡し、「もういいですよ、ありがとう」と伝え(やっぱり日本語)、部屋から出てもらいました。

「ありがとうございました」と一礼し、扉を閉めて

「ふう〜っ、よく帰ってこれたな、俺」

とつぶやき、そのままベッドへ倒れこみました。いやあ〜冒険した。

Une robe rouge (赤いワンピース)

さて、旅先のパリ郊外で迷子になる という「はぐれデカイ男～象牙色編～」を見事成し遂げ、無事にホテルに辿りついた僕は、ベッドに横たわり少し寝ました。

自分で自分を褒めたかったですね、よくぞ無事帰還した、と。

いや、その前に迷子になるべくしてなった無計画と準備のなさを反省すべきではありますが。

さて、そのまま少し眠った僕は夕方過ぎに、同室の友人が帰ってきたため、今日起きたことを伝え、またもや爆笑され（モンマルトルで囲まれた僕を写真 撮って更に爆笑してたのと同じ人物）、腹が減ったのでメシでもいこうか、という話になりました。

メシといっても金がない身分。

ホテル近くのスーパーに行き、店内にあったマクドナルドで晩飯を軽く済ませ、CDショップがあったので軽く見ることに。

食料品がメインのスーパーでマックとCDショップという変わったつくりのお店でしたね。

そこで、当時日本でも少し流行りかけた「ドリームテクノ」と呼ばれるジャンルのコンピを2枚ほどジャケ買いし、レジへ。

レジで会計の際に、モタついてしまい（というか金の単位すらまともに覚えてないからいくら払えばいいのかもよくわかってないだけ）、財布の中を探してたら、レジのおばちゃん「もう、いいよ。行って」（もちろんフランス語）いやいや、お金まだ全部払ってないよ？いいの？アバウトだなあ。日本じゃ有り得ないな。

メシも終わり、CDも買って、ホントはCLUBでも行きたかったんすけど、やっぱり慣れない海外の夜は怖いのでおとなしくホテルに戻ることに。

ホテルに戻って自分たちの部屋の前でカードキーを挿し、扉を開け、部屋に入りました。

僕は元々、田舎の人間なんで結構玄関開けっ放しにしたり、鍵かけなかったり、「戸締り」っていう習慣があまりなかったんですよね、当時。

その時も自分らの部屋の扉を勢いよく開けたはいいいけど閉めてなくて、ほんの何秒間か開けっ放しになってました。

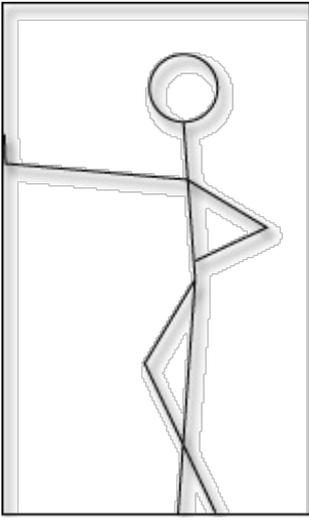
「コンコン」 扉をノックする音が聞こえて、後ろから「ハァ〜イ」という女性の声が聞こえます。

その声に反応し振り返ってみると、なんとそこには真っ赤なワンピースを着た黒人の女性が立っていました。

パツパツの赤いワンピースですごいスタイル良くて更にミニ、そんな格好したSEXYな女性がドアのへりに手をかけ、足を交差させ満面笑みでニヤニヤしながら こっちを見てます。

一発で「尋常じゃねえ」と感じました。

こんな感じでこっちを見ながらニヤニヤしてます。（絵が拙くてすみません）



誰がどうみても怪しいです。

僕らは「はぁ？」という感じで少しの間、思考停止。意味が解らない。

するとその女性は僕らの部屋に入ってこようとするので、ひとまず僕がそれを止めます。

「ちょっと、ちょっと待って」と両手で彼女の動きを制し、扉付近で留めます。

その後ろにはオバサンが一人いてこっちを見てます。仲間か？

すると赤い彼女はもう一度僕に向かって「ハァ〜イ」と愛想を振りまく。意味がわからん。

とりあえず、「あんた誰？何でここにいるの？」と聞きます（ええ、もちろん日本語で）。通じない。

仕方がないので英語で「What's your Name?」すると赤い彼女は、

「I ' am Naomi Campbell (ナオミ・キャンベル) !!」

と言われた瞬間に僕も思わず

「嘘をつくな、嘘を!!」

とツッコみます。

だって違うもん、顔が。

それにこんなとこいるわけないじゃん。そんな高いホテルでもないんだし。

確かに背は高いしキレイはキレイだからモデルっぽいけど、ねーちゃん それは言いすぎだわ（笑）

僕らが旅行に行ったのが1996年の12月で久保田利伸とのデュエット「LA・LA・LA LOVE SONG」（1996年4月～6月の月9ドラマ「ロングバケーション」の主題歌）はその年の大ヒット曲でした。

ねーちゃん、いくらパッと見、似てるかもしれない、日本人に（その当時）一番有名かもしれない黒人女性だからといってなんぼなんでもわかるぞ、その嘘 は!!（笑）

そのねーちゃんの嘘があまりに突拍子もないので笑えてしまい、「わかった、わかった」といいながら彼女に外へ出るように促します。

「ねーちゃん、ナオミ・キャンベルってのはよくわかったから帰ってくれ。」と。

それでも何度も彼女は執拗に「I ' am Naomi Campbell」と僕らにうったえかける。

それこそこっちが「本当にナオミ・キャンベルじゃないのか？」と信じてあげたくなるようなくらい（信じないけどー）。

ねーちゃん、なかなか帰らない。

う〜ん、困ったな。ラチあかねえ。本当にナオミ・キャンベルかもしれない・・・（←本当にナオミ・キャンベルだっ

たとしても別にファンじゃねーし、特に用事ないし)。

どうすりゃ引き下がるかなあ、それにもし本当だったら・・・という思いが一瞬頭をよぎる・・・。

そこで思いついたのが、

サイン描いてもらおう!!

もし、本物だったとしたらサインは貴重な記念になるし、偽者だったらいいネタになる。

僕はカバンからメモ帳とボールペンを取り出し、彼女に渡す。「サイン、サイン」

すると彼女はサラサラ〜ッとペンを走らせ、僕にメモを渡すと帰っていった。

何で帰ったのかわからないし、何しに来たのかもわからないけど、それは汚い字で(もしかしたら読み間違いしてるかもしれないけど)メモにはこう書いてあった。

「Naomi Cancell (ナオミ・キャンセル)」

・・・やっぱり、偽者じゃねーか!!

このときのメモ帳、捨てた記憶はないんで家中ひっくり返せばどっかに眠ってると思うんですけど・・・また見つかったらアップします。

Oh, c'est ... ? Dans une telle place? (え〜っ!? こんなところに?)

さて、赤いワンピースを撃退した翌日は行きの飛行機でちょっかいかけてたコにデートを申し込んであったので、朝からもウキウキウォッチング!!

行く場所はコンコルド広場とルーブル美術館。

といっても僕の目的は「そのコとのデート」なんでどこでもいいし、意識もそこに集中してるので、芸術とか美術品の鑑賞とかどうでもよくなってる。

手とかもつなぎたいけど照れてしまい（というより、それをしたときに怒られそうで怖くて）出来ない。

惚れたモン負けですよ、ホント。

まず、ルーブル美術館。

広場にガラス張りの逆ピラミッドがあって、その手前で地下にエスカレーターで降りるとそこが入り口でした。地下から見るとピラミッドがすっげえキレイ。

広いですね、さすがに回るのに何日もかかる、と言われてるだけのことはある。彼女はもっとゆっくり回りたかったようですが、僕は結構早足で回ってしまう。申し訳ないことしたなあ。

絵とかよりも彫像とか歴史的な遺品とかの方が見て面白いですよね。だからエジプト系の展示物見てたりとか。あ、モナリザはちゃんと見てきました。

ルーブル美術館を出て、近くにあったVirginレコードのお店へ。

ここでも幾つかCDを物色。ドリームテクノのコンピを買う。前日、ホテルで見てたテレビでCMやってたCDだった。ってことは結構いいのかな？ジャケ買い したけなだけで。

と、ここで、同室のツレと偶然遭遇（こいつはホントに・・・）。何故か一緒にCD見たり、雑誌見て回ったり。

しかし、僕としては「貴様、それでもツレか？」と言いたくなる。今なら「空気を読め、考えるな、感じろ」です。こっちは「デート中」なんだよ、邪魔すん じゃねーっての!!

頼むから俺のこの殺気を感じろ!!

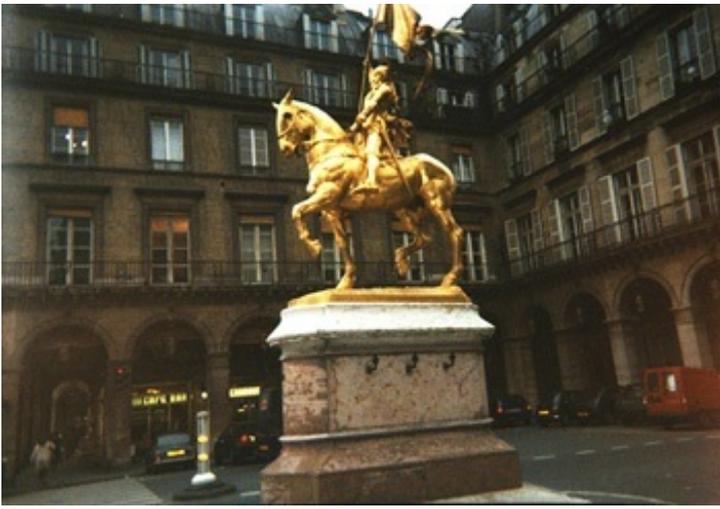
とりあえず、店を出たら、ツレは別の場所へ行く、ということで別れた。よし。デート再開。

時間は丁度お昼。どっかで食べよう、となったが金額が怖くてどの店入ればいいのかサッパリ。とりあえずCafeっぽいところに入った。ここならそんな高くないだろう。

で、メニュー見て（というより金額のみ見て）注文。何が来たんだっけなあ・・・確かフランクフルトとパンだったかなあ。全然足りない。

しかし、金もないし、メシに時間かけられないからこれでガマン。

カフェを出て、そのままコンコルド広場（だったけ？）を散歩していると、何やら金色に光る像がある・・・もしかして・・・



ジャンヌ・ダルクじゃ——————ん!!

こんな近くにあったんかい!! 昨日の努力やトラブルは何だったんだー!!とショック。時間と金と体力の浪費だー!!
という気持ちもあったけど、諦めてたものが棚ボタで手に入ったような、そんな嬉しい気持ちもあり（愛しの人に会った、そんな感覚でもあります）、ツレの女の子そっちのけで写真撮影。

いやいや、かっこいい。

よくよく考えてみりゃ、「英雄」なわけですから中心街に銅像なり、記念碑なりあってもおかしくないわなあ。
下調べしてない僕が悪いんですけどね。写真撮ったあともボケーっと眺める僕。それぐらいキレイでしたよ。
ある意味今回の卒業旅行で僕が一番見たかった、会いたかった「人」であり、目的でしたから。

そうこうしてるうちにデートは終了。

彼女は別の友人と夕食の約束をしてるのでホテルに戻ることに。ホテルに戻っても夢見心地な僕。デートも達成、目的も達成しましたからね。気分的には「両手に花状態でデートした」気分です。

昨日までトラブル続きだったけど、いやぁ楽しい。

その日も同室のツレと晩飯を食うことに。

というよりお互いに金ないし、特に約束してないからそうなるだけなんだけど。

で、さぁ何を食おう？と。

マックは昨日食ったし、出かけるのもめんどくさい。金もないし。と、そこでツレ、

「俺、カップラーメンとインスタント味噌汁持ってきてるぞ。お前も食う？」

お前は偉い。昼間は「空気を読め」なんて思ったけど、申し訳ない、お前はイイヤツだよ。

カップラーメンと味噌汁を旅行カバンから取り出す、う～ん何か久々に見る日本語だ。安心する。

で、お湯はどうすんだ？と聞くと、「どうしよう？」と返ってきた。おいおい。

二人で協議した結果、ホテルの一階にあるレストランでお湯をもらうことに決定。

フロントに行き、レストランでお湯ってもらえるの？と聞いてみるけど上手く伝わらない。う～んどうしよう？

と、そこにタイミングよく、先生登場。先生にレストランでお湯がもらえるのかどうか聞いてみる。

「言えばもらえると思うけど、HotWaterじゃだめだぞ。boiled waterって言わないと熱いお湯出てこないぞ。」なるほど。boil=沸かした、ね。さすが先生。

レストラン行って、シェフを手招きして「boiled water please」と頼んでみると、不思議そうな顔はされたけど、少

し待ってたらお湯持ってきてくれた。

しかもちゃんと断熱の大きめの紙コップで。気が利くねー。

それを持って、エレベーターに乗り部屋へ。エレベーターで他の客も不思議そうに僕らを見てる。

想像してみてください。湯気出てるコップ持って名古屋弁で騒いでる象牙色のデカイ男とその友人らしき男。明らかに不審人物。

部屋に戻りラーメンと味噌汁にお湯を入れて待つ。

部屋にテーブルはないので、床に直置きで、僕らもどっかとあぐらで座ってラーメンをすする・・・カップラーメンってこんなに美味かったっけ？もう、貪る貪る。

こんな美味しいラーメンねえぞ、と言いながら二人して食ってました。パリにいるのもあと2日。残り2日をどう乗り切るか、頭はそれでいっぱいです。

Je suis Croisière du dîner dans Yankee, Paris (ヤンキー、パリでディナークルーズ)

翌日、今日はどこにも行くアテがないので友人グループの隅っこでおとなしく「空気」のような存在でいることに。そんな仲良くないから仕方がない（それにあんな気持ち悪い頭した人間とは一緒にはおれんやろ）。

しかし、毎朝フランスパン食ってるからか口の中の皮が剥けてきた。ザックザクですよ、ホント。もうしばらくフランスパンは食べたくない、と思った。

そして、ほんとはについて回るだけで「ノミの市」と呼ばれるフリマみたいな場所へ。

色々変わったものもあったし、服とかも良さげなのあったんで欲しかったんですけどね、ガマン、ガマン。ほとんど会話することなく、買い物もせず、「何しに来たん？」というぐらいな感じ。

ホテルに戻り、また晩飯をどうするか悩む。

行き着いたのはスーパーで食材を買って、簡単に自分たちで何か作ろう!!という運びに。

同室のツレと二人でスーパーに行き、何かないか探してみる。まずは主食となるものは・・・パンしかないな。パンを探すが、食パンがない。菓子パンもない。あるのはフランスパンとクロワッサンのみ（さすがフランス）。自分たちの食文化にも誇りを持っていることが、よくわかる。

フランスパンはも有り得なかったもので、クロワッサンとブロック状のチーズ、レタス、ハムを買って帰り、部屋で指でクロワッサンとレタスをちぎって挟み込み、ハムとチーズ乗っけてムリヤリサンドイッチにする・・・マズイ。みごとにそれぞれの食材が個性を発揮している。調和ゼロ。

2つ作って、自分でも食えないマズさなので、諦めた。

翌日は最終日。

最終日は毎年恒例でセーヌ川でのディナークルーズ。

もう、みんなめかしこんでのパーティーです。

だから、今回の旅行にはみなさんドレスなりスーツなり、タキシードなり衣装も持ち込んでます。

日中は現地で衣装を買う、という友人たちにくっついて、ベルサーチヘショッピング。「派手」な印象がありますが、「クラシック」というジャンルもあるようで、これはカッコよかった（当然値段も相当）。

ま、僕には手が出ません。気に入った商品があったようなので、ツレのショッピング待ちしてホテルに戻りました。

ここで、ここで、最後に僕のイタイ部分が大爆発。

スゴイですよ。

笑ってください、盛大に。

寧ろ笑ってもらえれば助かります。

「え〜っ？」て引かれるのが一番キツイし、無言は更にキツイ。

何がイタイってそう、今回の僕の衣装がイタイ。

衣装は「スーツ」

→これは普通ですよ。

しかし、このスーツ、何をかくそう、「通販」です。

→うん、まあ、別におかしくないと思います。

では何がおかしいのか・・・「マオカラー」

→ま、でも、これも別にいいかもしれませんがね（引っ張りすぎ?）。アリだと思います。

さあ、何がおかしいのか・・・?

それは「黒のマオカラータイプのスーツを20歳の僕が着ること」がイタイんですよ。

「えっ?別にそんなことないんじゃないの?」って思います?（果たして写真見てもそう思えるかな?）

冷静に一つずつイメージしてください。まず、このときの僕は、

20歳になったばかり

→つい、この前まで「学生服」を着ていた。

黒のマオカラーのスーツ

→遠めにみたら学生服に見えるかも。

頭の色は

→象牙色

スーツの中は

→上が黒なんでね、白のワイシャツ（これもマオカラー）

イメージつきましたか?

そう、「田舎のガラの悪いヤンキーのニーチャン」の完成です。ねーイタイでしょ!?

「田舎のガラの悪い（頭も悪い）のヤンニイ」がですね、フランスはパリのセーヌ川でディナークルーズです。学ラン着て。意味がわからんでしょ?

みんなオシャレなんですよ。

さすがデザイン系なんですよ。

男連中キマってるんすよ。

女性のみなさん、キレイなんですよ。

その中にヤンキーがポツーンと一人います。

ひどいでしょ?、20歳の僕。

部屋でこのスーツに着替えたときは鏡見て愕然としましたよ、自分でも「ガクランやん」って。

「通販」で買ったがゆえに、実際に着て買ったわけじゃないから、自分が着た姿をイメージしてなかったんですよ。

ツレも「ガクランみてーじゃん」と。

でも、他人に言われるとイラッと来るんですよ（当時は）。

「ガクランじゃねーよ」とは言うものの誰がどう見てもガクラン。

外人さんとか、年齢いった人とかが着るとかっこいいのかもしれませんが、僕ではダメでした。若さ=イタさですね、ホント。

しかし、まあ、この風貌で、身長183ありますからね、怖いのと気持ち悪いのとので、誰も何も言ってくる（写真、わかりますかね?背景暗いけどガクラン 着てるっぽいって）。



食事は結構豪華で、フランス来て初めてまともな食事したんじゃないかな？でっかい肉もあったし。飢えてましたからね。ガッツいたガッツいた。

嫌われモノのヤンニイが金なくて地元の食堂のオバチャンから温かいゴハンを差し出されて、涙流しながら、むせながら、ガッツく、そんな心温まるシーンを再現してました（ちなみにこのスーツまだ持ってます）。

周りの視線と自分でもガクランと認識してるので早々と上着を脱いで、イスにかける僕。恥ずかしいヤツめ。

上着脱いだら、もう怖いものなんてない。この前デートしたコ誘って甲板に上がって写真撮ったり、ツレと歓談したり景色見たり、盛り上がってましたよ。

季節は12月、真冬のフランスで上着着ずにワイシャツ1枚の僕。

恥ずかしいからと思って上着脱いだのに、そんな薄着で動き回る僕は結局浮いてました（ええ、船の上だけにね「浮いてます」）。

翌日、いよいよ日本に帰ります。

朝早くにホテルを出て、空港へ向かいます。

昼前ぐらいに空港へ着いて、飛行機の時間を待ちますが、一向に動かない。

待ちくたびれてると同じ学校の女の子だけど話したことないコが同じ部屋だったツレと話しています。

「似顔絵高くて、お金結構使っちゃった〜」などと話してるのが聞こえます。

ツレ、別に言わなくていいのに、「こいつも似顔絵描かれて、金払わないってキレてさ〜困まれて値段交渉してたよ」と。

おい、その言い方だと、俺が悪いみたいじゃねーか、ちゃんと説明しろ、ということで会話に横入りし、事情を説明する。

彼女は「すご〜い、私怖くて言われるままに払っちゃったよ〜。へ〜かっこいい!!」と。

それってかっこいいのか？

そんな話をしてヒマを潰していると、先生より重大発表が。

「飛行機会社がストに入ったため、飛行機が飛ばない!!」

っておいおい。どーすんだよ。

で、どうやら、その話を聞いて先生方は対策を練ってたらしくて、その対策を決めてからこっちに報告したもよう。その対策とはフランスからまず韓国へ飛んで、韓国から関西空港へ。

そしてそこから名古屋までバスなんだけど途中で生徒を降ろしながら名古屋へ向かう、というとんでもないルート。グッタグダに疲れてるから帰りの飛行機は爆睡。韓国ついたはいいけど昼なのか夜なのかもわからん。そのまま飛行機を乗り換え関空へ。関空から名古屋 に向かい、普通に電車に乗って家に帰りました。

何か色んなことがあった旅行でしたが、終わってみると楽しかったですねー。いや、海外楽しいわ、マジで。もう少し気持ちとお金に余裕があればもっと楽しかったろうし、トラブルも楽しめたらうな、と思います。当時はブログなんてなかったからね、今だったら「いいネタ発見」って思えるだろうし。

またパリ行きたいですね。次はスニーカーと地図を持って・・・。

火事じゃん!!

これは19歳の12月31日の出来事。

当時、警備会社でアルバイトをしまして、金のない学生にとっちゃ、年末年始なんて関係ない。それこそ、「年末年始手当」を狙ってバイトはいりまくりな生活。そんな頃のお話です。

古い大きな工場に毎週レギュラーで勤務をしまして、勤務帯は週末のみの勤務で土朝から日朝までと日朝から月朝までの24時間勤務です。

そのときは確か土朝～日朝勤務だったかな？24時間といっても仮眠時間もあるし、主な業務は電話番号と定時に巡回にできるだけの簡単な勤務、しかも大晦日ですからね、電話もかかってきません。

結構、のんびり出来る仕事場でして（一人勤務）、やることやってりゃ特に問題もない場所で、よく学校の課題やったりしてたのを覚えてます。

ただ、問題があるとしたら、結構治安はあまり良くない、と言われてる一帯で工場にシンナーが置いてあるので、それを吸いにたまに地元のヤンキーが侵入してくるから、それを防ぐのと、発見したら（危険なので）警察に通報すること、それぐらいです。

その日も22時の巡回を終え、24時の電話報告したら、あとは寝るだけ（早朝5時に巡回出るから早めに寝る）という状態でして、控え室でテレビを見てました。

大晦日ですからね、テレビも色々やってるし、紅白も見てたかな？

ここで簡単に位置関係を説明しますと事務所に「警備室」と呼ばれるロッカーやパーテーションで区切られた一画がありまして、その横が控え室。

その警備室の前には正門があって、来客受付や電話対応などが出来るようになってます。

そしてその正門からは大きなマンションと並木、そして公園が視界に入ります。

23時20分ぐらいだったかなあ。

テレビも見終わり、控え室から出て警備室の机に座り、ボケーっと外を見てました。

ふと窓の外を見ると、ちょっと明るいですよ。

「ん、なんだ？」と思ってよく見るとそれは「炎」の明るさでした。ちょうど、並木の上ぐらいの高さです。

僕は「何で並木の上に炎があるんだ？・・・・・・」と不思議に思った瞬間、

「火事じゃん!!」

ということに気づきました。すぐさま、工場を飛び出し、近くまで確認しにいきます。

よく見ると、それは並木が燃えてるんじゃなくてその後ろのマンションの部屋から轟々と炎が出てる。

おいおい。シャレにならんぞ、と思いながらもソッコー消防に電話。幸い、電話の目の前に工場の住所が書いてあったので、通報自体は無事に終了。

で、次に気づいたのが自分がある工場には「大量のシンナー」が置いてある、ということ。

火の粉飛んできて、引火したらそれこそ大惨事。すぐさま会社に電話。

「目の前が火事なんですよ。どうしましょう？」と聞くと、「工場に火の粉は飛んできてないんやな？で、消防にも通報した。んなら、お前はそこを動くな、絶対現場とか行くなよ」とクギを指されました。

さすが、僕をわかってらっしゃる、こういうとき大体首を突っ込んでいらんことするのが僕（笑

)

そのまま座ってるだけでも出来ずに、警備室から外に出て、下から眺めてました。

元々、人通りも少ない路地かつ大晦日で辺りはまだ静か。2~3人の人が下から僕と一緒に炎を眺めてます。

確か4階だったかな、そんな上の方でも下にいる僕らはあったかいんですよ。その火力の強さわかります？

なかなか着かない消防隊。大晦日+道が細いので（路上駐車も多い場所だし）時間かかっているかも知れない。

徐々に人が増えてきて、辺りも異変に気づきだした。ざわざわと至るところで声が聞こえ始め、同じマンションの住人の方も気づき出しました。

ふと気づくと、視線を感じるんですね。周りの（気のせいかもしれないけど、後ろ振り返ってみて、その後ろの人や横見て、横の人と目が合うのって、確実にこっち見てますよね）。

勤務中なんで当然、制服着てるんですよ。警備の。

で、警備の服って若干「警察」に似てたりするじゃないですか。

おまけに外は暗いから見分けつきにくいですよ。「あれ？もしかして警察と勘違いされてる・・・？」みたいな。

周囲の人の目がこう言ってます。

「お前、（救助に）行けよ。」と。

無言のプレッシャー。

何かいたたまれなくなってきた、不思議ですね、「あ～やっぱ行かないとマズイのかなあ」なんて思えてきちゃって。

いや、確かにこーいう時にやたら張り切るタイプではあるんだけど、会社からも止められてるし、炎の勢いハンパじゃないから、さすがに膝震えてる。

膝の振るえVS周囲の目の闘い。軍配は周囲の目に上がりました。

僕はビビりながら、燃えてる階と場所を下から確認し、ベランダの反対側にあるマンションの階段を上がりました。近くに消火器もあったので、それかついで燃えてる部屋の玄関のドアノブを握りしめました。

その瞬間。

頭に浮かんできたのは「人が燃えてたら・・・」とか「バックドラフト起きたら・・・」とか怖いイメージばかり。

怖くてドアが開けられない。

情けないことに、そのまま消火器を元に戻して、また下に戻りました。いや、ホントに怖いって思いました。膝の振るえもハンパじゃない。

消火器1本でどうにもならない、とか素人では危険すぎる、とか自分に言い訳しまくってね（事実ではあるけど、カッコ悪い）。

そうこうしていると通報してから20分ぐらいかな。消防隊到着。消火活動始まりました。

鎮火も20分ぐらいかな。結構早く消えてくれて助かった。気づいたら年明けてました。

消防の人に通報したときの状況を再度説明して、会社にも報告して、火の粉も飛んでこなかったので一件落着。

まあ、ホント、ビックリしましたよ。意外と最初わかんないもんなんですよ。

「何であんなところが燃えてるんだろう？」って考えるだけで、火事って気づくのには時間かかりましたもん。

想像したこともないし、想像外の事柄起きるとパニックではないけれど、それとわかるまで時間かかる、というのを改めて実感しながら1996年の正月を迎えました（まさかその2年後に消防関連の仕事に就くとは思ってもよらなかったけど）。

飛び込み営業の旅～浜松編

今からもう4年前になるんすね。

丁度、今ぐらいの時期かな。飛び込み営業の旅に出たのは。

当時、まだDTPや印刷の仕事がメインでして、毎日飛び込んで玉砕してました。

そんな頃に、取引先の営業マンから

「浜松にはまだ仕事が結構あるんですよ」

と教えられ（そそのかされ？）、浜松まで営業行くことにしました。

確かGW前だったかな、浜松の地図をMAPサイトで何枚も出力して、セロテープでくっつけて巨大な地図にして地図を作り、準備をしてました。

当時の僕は企画もナシで、ただ飛び込んで名刺とパンフ渡すだけ。売り口上も「元デザイナーでデザインが出来る営業だからデザイン代もその場で出せる。」みたいなこと言ってたかな。

別にウリでもなんでもない。ああ、あと安いですよってぐらいかな。

アポイントをとってた時期もあったんですけど、電話で断られるのが嫌だったのと、いきなり行けば担当者がいたら話が出るし（電話だと居留守使われるし、担当者に繋がる前に電話切られてしまうから）。

でも、今考えると飛び込んで名刺やパンフを減らす、それに時間を費やすこと、それ自体が「仕事」と勘違いしていたんですよ。

確かに「種マキ」とも言えるけど、種を蒔きっぱなしで刈り取ることをしなかった。それはやっぱり勘違いしてたからだろうな、と思う。

もちろん、そんな営業で仕事がとれるわけではない。

営業始めて間もない頃に、飛び込んで何件かの仕事を取ってきたもんだから、自分に言い聞かすんですよ「出来る」って。

だから取れない時期が続くと焦りが出てきてしまう。その焦りが余計におかしな行動を取らせる。悪循環してました。

そんな頃に冒頭の話聞いたもんだから「やってみよう」って。準備して、大量のパンフを車に積み込み、意気揚々と浜松へ向かいました。

他の会社の営業の方とかにこの話をすると「営業の鑑」とか「すごい」とか言われるけど、「自分が何をしたいのか解らないから頑張ってるフリしてるだけ」だったんですよ。自分でも気がついてた。

ガス代の1万だけもらって（勝手に僕が実費で行くって言い張っただけなんで）、浜松へ。

飛び込み営業の旅～浜松編2

高速飛ばして、一路、浜松へ。

天気も良いし、何ていうかドライブ気分になっちゃって、テンション上がってる。

自分の好きな音楽かけて、「もしかしたら仕事たくさんもらえたりして」なんてムシのいい考えをしながら、浮かれまくって浜松到着。

浜松について、とにかく目についた企業に飛び込みました。基準は「自社ビル」。

自社ビルで経営しているところは一通り飛び込んだ。担当者に合わせてPR出来た場所もあったし、門前払いも食らった。初日は結構回ったかな？大通りばっか走って、

「名古屋から来ました。浜松～名古屋間なんて近いですから、すぐ駆けつけますよ。何か仕事をいただけませんか？」

とパンフと名刺渡して、結構元気よく調子よく回ってたかな。

担当者不在なら担当者の帰ってくる時間聞いて、電話番号聞いてかけなおして「3日間いますから」なんて再アポとったりして。初日は充実してたと思う。

17時くらいまで回ってたかなあ。

さすがに疲れたので、今夜の寝床を探すことに。といっても寝床は車なので正確に言うと「路上駐車出来る場所」ですね。

車をゆっくり走らせながら、駐車場所を探します。他の車も停めていて、街中から少し離れた場所によさげな場所を発見。寝床は見つけたので、次は銭湯です。

地元の人に聞いたり、ツレに電話したりして銭湯の場所を教えてもらい、ゆっくり今日の疲れを癒します。

調子よくて、それなりに大手企業の担当者の名刺ももらえたので、上司とかにも意気揚々と電話。

疲れも取れて、翌日回る企業の下調べのため、ネットカフェへ。

「浜松 本社」とか「浜松 自社ビル」とかで検索かけて、出てきた企業のサイトをチェックして住所とか電話番号メモったりなんかして。

で、すぐ帰ればいいのに、つつい漫画読んだり、ネット見たりして気づいたら真夜中になってた。

代金もイタイ金額に。金無いくせに。

車に戻り、寝床モードに変えてちゃんとジャージに着替えて寝ます。

スーツとネクタイはシワにならないようにハンガーにかけて、汗臭くないように香水振って寝ます。結構不思議な感覚でしたね。

周りはすごい静かだし、眠たくて仕方がないから車で寝る、でもなく時間潰しで寝るわけでもなく、車にマットと毛布積んで寝てる自分が。「何してんだろ？」って。

飛び込み営業の旅～浜松編3

翌朝、8時ぐらいに起きて近くのコンビニへ。

朝飯とワックス、水買って、コンビニの駐車場で朝飯と洗顔、歯磨きを済ます。

出社途中なんかな？ スーツ着てる会社員何名かに不思議そうな顔をされる。

そりゃ不思議だろうな、コンビニの駐車場で歯を磨くスーツ姿の男。

で、9時ジャストに昨夜調べた企業に「飛び込み」をしかける。

飛び込みされる側にとっちゃいい迷惑。

それでも1社目はまだ担当者の方がちゃんと応対してくれた（ありがとうございます）んだけど2件目から調子が狂いだす。

集中力がキレたのかな？

たまたまなのか、門前払いやたらい回しに遇いだしてテンションがガタ落ち。おまけに方向音痴だから少し離れた場所の企業さんに行こうと思っても全然辿りつかない。

腹はたってくるし（誰に対してだ？）、嫌気さすし、せっかく見つけて飛び込んでも悪いクセが出だして、名刺とパンフを渡すだけ、食らい下がることもない。全然売り込まない。

名刺とパンフ渡すだけで「仕事をしている」感覚になる。

全然、回れず「もう今日はアカンわ」と勝手に決め込み、今日の寝床を探すことに。

昨日の場所でもよかったんだけど場所を変えてみようと思い探してみる。銭湯も違う場所を教えてもらい、メシも昨日ネットカフェで金を使ってしまったので、コンビニで済ます。

この時点で「明日も飛び込むのかあ～」なんてもうイヤイヤで仕事している状態に。

少し寂しくなってきたのでちょっと奥さんに電話してみる。

少しは励ましや、慰めの言葉が出てくるかと思えば「何やった？」と普通の反応。

オメー、旦那が苦勞してるのに、何だその興味なさげな反応は。何言っても「ふ～ん」という返事に「コイツダメだ。」と諦めて電話を切る。

3日目、初日に会えなかった担当者の方に会いに行ったり偶然見つけた大手企業とかに飛び込みかけたりして玉砕して、完全にテンション・気力ゼロ。

市内をぐるぐる周り「帰ろう」と決める。

帰りは下道で1号線をひたすら走って夕方に事務所到着。

三日間かけて、20社ぐらい回ったかな。

今考えると、そんな大手回ったところで、大手はいきなり無名の立ち上がって間もない会社に仕事出さないでしょ、フツー。

実績もないんだし、それに地元の企業使ったほうがいいだろうし。

いきなり名古屋から押しかけてきた営業に誰が仕事出す？って感じ。

取引先の会社の人間は今までの付き合いや会社の今までの実績があって仕事もらえてるのに、それが何一つないんだし、飛び込んだあとでフォローで電話したり、定期的に顔を出すわけでもない。それじゃあね・・・。ということで「車中泊飛び込み営業の旅～浜松編～」は大失敗に終わりました。

（ま、実は懲りずにその翌月「[車中泊飛び込み営業の旅～京都編～](#)」を敢行するんだけど）。

飛び込み営業の旅～京都編

2005年の5月に「[飛び込み営業の旅～浜松編～](#)」を敢行し、ものの見事に大失敗してしまう。受注につながるものはなにもなく（当たり前だけど）、このままではマズイと思い、翌月懲りずに今度は「京都」へ。

何故、京都にしたかというところ
近い場所で比較的有名な都市である
滋賀の通販会社に一度行ったことがある
取引先の本社があった
取引先に商品の納品をしている知り合いの業者がいた
観光地だからそういった関連の印刷物があると思いついて
といった理由から京都にしました。

前はガス代ももらったけど、今回はナシ（自らね）。ただし、2日間（1泊2日）にしました。

前回と同じように京都の地図を出力し、地図を作成し、パンフを車に積み込みイザ出発。時期は6月。日差しがいよいよ厳しい。

朝早くに家を出て、滋賀まで高速。草津インターだっけな？そこで降りて、まず通販会社へ行く。すると社長は今日は出張でいない、とのこと。

一度、挨拶にはきてるから新しく名刺とパンフを渡して下道で京都へ向かう。

京都市内に着き、早速飛び込み開始。

大通り沿いに攻めていきます。

「碁盤の目のように通りが走ってるから道はわかりやすい」と聞いてたんだけど、全然迷う。似てるんだよ、造りが（僕が目で見ると）。

幾つか回ってみたけど、浜松の時より反応薄い。全然担当者も会えないし、門前払いが続く。

ここで、今回の一番受注率が高いであろうと（勝手に）思う「取引先の本社」へ。

午前中に何うつもりが、道に迷って昼過ぎに。

何とか探し当てて、聞いていた担当者の方の名前を告げ、「～さんから紹介していただきました」と名前を借りて商談に漕ぎ着ける。

その日、初めてまともに対応してくれた企業さんだった。

「名古屋支店の方々にはお世話になっております。～中略～京都ではそういった仕事はどうでしょうか？」

と聞いてみると、

「京都は実は印刷物少ないんだよ」というご回答。

景観の問題で貼ったり飾ったりする場所が少ない、祭りなどのイベントの広報物などは同じ業者を使っているから外に出ない、それに地元の企業を優先するから、といった内容でした。

一番期待していただけにこの返事は僕にとって効きました。目の前真っ暗、血の気が引いていくのがわかります。

すごすごと、その企業を後にし、次に期待していた「業者」さんの企業を探します。

中心街からちょっと外れたトコにあるようで、これまた探すのが大変。道は細いし、観光地に入

ってしまうと観光客ばかりで車だと走りにくい。

それでも、その業者さんの担当の方はすごくいい人だったし、携帯番号も知ってる。何回も電話でやり取りしたことあったのでいざとなったら電話してどこかで落ち合えばいいや、なんて考えてました。

1時間ほど迷走し、仕方なく携帯鳴らしてみる。お、つながった。

「平田ですけど、今、京都にいるんすよね。それで何か仕事いただけないかと思って、お会いしてお話したいんですが・・・」と伺ってみると、

「え～そうなんですか・・・？う～ん、いや、今出てるんで・・・」と濁されてしまった。そして明らかに迷惑そう。

そして、1時間ほどしたらまた連絡する、という返事をいただいたので、近くのコンビニで待機。その業者さんの会社の近くにはいることは住所で解ってたんで、「もう大丈夫」と安心しておりました。

1時間経過・・・連絡がない。10分・・・20分・・・連絡がありません。

ダメならダメで他あたりたいので何にせよ連絡が欲しいんだが・・・。

携帯鳴らしてみます。出ません。2、3回鳴らしてみたけど繋がらない。

仕方ないので会社側に電話してみる。いない、と言われる。2時間経過したけど音沙汰ない。

我慢しきれず、その辺りをグルグル回りながら連絡待つけど電話は鳴らない。

結局、そのまま17時過ぎてしまい、何か「裏切られた」みたいな気持ちになって、銭湯と晩飯を食う場所を探す。

テンション落ちまくりでもう帰りたい。けど、自分で決めたことだから・・・。

飛び込み営業の旅～京都編2

思ったような成果が上げられず思惑も全て外れ、一日を終える。

「今日は散々な目に遭った一日だったなあ～」なんて、その時は思ってたけど本当に「散々な目」に遭うのはこれからだった。

この日は快晴で、とても暑かったのもう汗でベタベタ。

メシより先に風呂入ってサッパリしたいという気持ちになったので、電話帳で銭湯の住所を調べて銭湯へ。

中心街から少し上がったところであって、何故かここはすぐに見つけることができた。

そこは、昔ながらの銭湯で、ちょっと懐かしい。風呂上りに「フルーツ牛乳」を購入し、なんだか楽しい気分になる。

風呂入ってサッパリしたところで中心街に戻りファミレス入って、「明日も頑張るぞ」と自分に活を入れるため、自分的にちょっと奮発。

この日が金曜日だったんですよ。翌日は土曜日で普通は会社とか休みだとは思いますが、僕は普段、土曜日は仕事ですし、制作会社や印刷会社は土曜日は仕事やってるところが多い。

そういったところも含めて回る予定でした。

メシも食って、今日の寝床はそのまま「ファミレスの駐車場」です。

結構広くてそのまま停めてても大丈夫そう。22時ぐらいだったかな？着替えて、車を「お泊りモード」に切り替え、寝ます・・・暑い!!

そう、6月で、しかもここは京都。名古屋に負けず蒸し暑い地域。前ははまだ5月中旬だったから昼間は暑くても夜は涼しかったけど、6月中旬といえば結構暑い。

とても寝れそうにないので、窓を開けて寝ることに。

防犯上嫌だったんですけど、仕方がない。

窓を開けたら途端に車内の室温は下がり、快適な気温に。

これで眠れる・・・と意識が落ちかけたあたりで

「ぷ～ん・・・」

という不快な音。そう、僕にとっては大敵である「蚊」。

昔から「蚊」に刺されると異常に腫れ上がったり、水ぶくれになったりするので（しかも刺されやすい）、大嫌い。

少し我慢してたけどもう既に何箇所かカユイ。

耐え切れず、起き上がって場所を変えることに。

まさか寝床を変えるハメになるなんて思ってもみなかったのも、今からの寝床探しはかなり厳しい。

コンビニの駐車場、トンネル出口の路肩、商店街、もう走っては停めて、寝てみて、移動の連続。

それでも蚊がいたり、明るくて騒がしくて寝れるような場所じゃなかったり、車の通りが多くて危険だったり、全然ダメ（そんなやり方しかない僕がダメなんですけどね）。

しかも夜だと、全然道がわからない。

昼間なら交差点の名前や風景とかで判別も出来るけど、暗くなると街の様相も変わるし、深刻的に迷子。

時間は既に午前1時を回ってる。やばい、早く寝ないと。しかし、更に僕に不運が遅いかかる。寝床をさがしての走行中、携帯の電池がなかったの、シガーライターを使って携帯の充電をしていました。

僕が使ってた車用充電器は結構はめ込みの部分がキツイもので、ハメるにも抜くにもチカラがいるような代物だったんですよ。

で、とりあえず、電池のゲージがいっぱいになったので、充電器を抜いたんですよ。

「ガコッ」とゴツイ音をたてて抜けました。それもシガーライターごと・・・。

車走らせながら、「うおっ？」とビックリ。これはヤバイと思い、車を路肩に停めて、シガーライターをはめなおします。

どうやら通常はツメかなんかでひっかかかかっている部分が外れたようで、素人考えで「一旦戻して、捻って外せば（充電器とシガーライターが）外れるんじゃないか・・・？」と思い、やってみました。

その瞬間、

「バシュッ」

と火花が散り、オーディオとエアコンがストップ。そしてヘッドライトも消えてしまった。

「ショートした・・・!？」と焦りに焦り、エンジン切って、再度かけなおしてみるけどオーディオもエアコンも反応がない。

というか、PCじゃないんだから「再起動」してもダメだろ、って今は普通に思う。

ショックでしたね。時間は2時近いし、音楽は必須な人間だけに無音は更に厳しい。

とにかく今は寝床を見つけないといけないので、そのまま回遊。

「明日、修理持ってくしかないかなあ～また金が飛んでく～」とか考えながら、思い切って今まで通ったことのない方向へハンドルを切る。

どんどん繁華街から離れ、静かになっていく。

更に無音で無灯火。怪しいことこの上ない。

午前3時を過ぎ、どうやら大きい公民館（～記念会館みたいなところ）か体育館かわかんないけどでっかい鳥居があって、小さい公園がある広い場所を見つけた。

人通りも少ないし、他に路上駐車もある。車を停めてみて寝てみる。時間も遅いから涼しくなってきたし蚊もいない。「やっと眠れそうだ・・・」と安心し、明日は修理工場探さないと・・・とそのまま就寝。

ただ、この場所に停めたことが更なる悲劇を呼ぶことに・・・。

飛び込み営業の旅～京都編3

蚊との戦いから逃れ、やっとの思いで安息の地を手に入れた僕。

朝早くに家を出たから眠さMAX。それにショートさせたもんだから気落ちもハンパじゃない。とっとと寝て気持ちを切り替えないと、と寝たのはいいが、油断大敵、更にこの後強烈なパンチをもらい、ダウン寸前に。

翌朝は8時くらいに目が覚めた。

昨夜のドタバタで体がダルい。

起きて周囲を見ると路上駐車はそのまま残ってるし、すこし散策してみると喫茶店があった。

腹も減ったし、朝飯はここにしようと思っ込んで、スーツに着替え、喫茶店へ。

サンドイッチを頼み、コーヒーを飲みながら、好きな小説を読む。う～ん優雅だ。こんな落ち着いた朝は久しぶりだなあ～なんて感じながら至福のひと時を過ごす。

そんな至福からこのあと一気に地獄に転落することも知らずに・・・。

余裕こいて、そんな至福のひと時に酔いしれた僕は時間が経つのも忘れ小説に没頭。気づいたら10時を過ぎていた。

「おっと、いかんいかん」と我に返り、レジで清算し、店を出る。

車に戻って「さあ、営業と修理工場だ」と意気込んでいたら、その「車」が見当たらない。どこにもない。

「あれ？場所間違えたかな？」と、もう一度自分の場所を確認し、記憶と照らしあわす。

「いや、確かここに停めたはず・・・。あれ？盗まれた？でも鍵はかけたから・・・」

と少々パニックになると足元には白い紙が・・・読んでみると

「ここに停めてあった○○-○○の車両はレッカー移動させました。 ○○警察署」

「うそ——————っ!!!!」

「トムとジェリー」なら目が飛び出て、更に紙を突き破ってるような状態です。

もうびっくりだし、情けないし、頭の中は自分の置かれている状況の整理が出来ないし。

よく見るとさっきまで停まっていた他の車は既に移動されており、レッカーされたのは僕の車だけ。

「そうか、地元の間人はここがヤバイの知ってて、タイミング計って停めてたんだ・・・」となんとか合点がいく。

とにかく車を取り返さないといけないので、紙に書いてあった警察署に電話してみる。

電話口で第一声怒られた。

それで、場所を聞いてみると「～川沿いで～辺りにある・・・」そんなん地元とちゃうからわからんわ!!

仕方ないので、道行く人に聞きながら警察署へ向かう。このとき、[フランスで迷子になったとき](#)のこと思い出した。

警察署について、交通課に通され、そこで住所と氏名を名乗り、免許証を渡す。

「あそこは観光地で駐車禁止区域なんですよ。何であんな場所に停めてたの？」

と聞かれても昨夜のドタバタの説明やら名古屋から仕事で来てることとか、車中泊でとか普通に言っても多分理解できないだろうし、どうやって伝えれば短くキチンと伝えられるかわからん

「いや、え～と名古屋から仕事で来たんですけど・・・」と説明をしかけたら、
「それは関係ありません。レッカー代と罰則金をお支払いいただきます。」
といきなりピシャリ。おいおい、今あんたが「何で停めた？」と聞いてきたから説明しようとしてたんですけど!!

人の話は最後まで聞け!!

幾らだったかなあ～？全部で3万近くは請求された気がする（罰則金12000+レッカー18000、あれ逆だったかな？）。

もちろん、財布の中にそんな金はないし、銀行行くにも自分の口座契約している銀行は地方銀行だからこっちにはない。

ということで、交渉開始する。

交渉つつっても「後払いにしてくれないか」という程度。実は何回か（レッカー移動を）やられてるので後払いできるのは知ってる。

それに手持ちの現金ないんだもん。すると、罰則金は後日振込みで大丈夫だが、レッカー代はこの場で支払え、と。

いやいや、それ、手持ちの金ほぼ全額なんですけど、それ。と交渉しても取り付く島もない。

腹立ってくるし、早くその場を離れたかったので、レッカー代だけ支払った。財布空っぽ。

車まで案内され、乗り込む。妙に車が愛おしく思えた。「おお～やっと取り戻した。」

しかし、テンションは昨夜の件からもうガタ落ち。気力もない。何もする気にならない。

適当にどっかの店の駐車場に停めて（もう周りが全く見えてない）、ひたすら落ち込む。半泣き状態。金ないから修理にも出せない。かつてないほどの落ち込みよう。

もう、何していいかわからないし、何もする気になれない。昼飯も食えない。

奥さんにグチ電話してみる。

答えは「ふ～ん」と「えーっお金なくなっちゃったの？」これだけ。

・・・こいつは。

夕方までそんな状態で、ウダウダしてたけど

金がない

→ 高速使えない

→ 下道使うしかない

→ 時間かかるから名古屋到着は夜

→ ライト点かない、ということに気づく。

これでやっと目が覚めて(?)動き出す。エンジンをかけ、名古屋へと繋がる道を探す。

上手く、迷うことなく道を見つけ、名古屋へ向かう。財布の中身は1000円ぐらいしかなかったのかな。

高速使えばガソリン足りるのはわかってたけど、下道となると足りるのかどうかわからない。

エアコン使えないのは幸いしたがとにかく暑いし、渋滞してる。

メシ食ってないのと（窓全けど）暑さから汗だくになりながら運転してるから頭もボーッとできてくる。

「俺は無事、名古屋まで辿りつくんだろうか・・・？」と心細さいっぱい。

オーディオイカれたせいで無音だし。そのまま下道をガソリン無駄使いしないように運転し、眠たくなったら自分で自分の顔を思いっきりひっぱたいて、フラフラになりながら家に着きました

。

これを以って「もう飛び込み営業の旅はやらねえ」と心に固く誓った僕でした（ま、実はその後

三重県四日市市内でもやったんですけど、この時は泊まりじゃないし、両親ともに四日市周辺出身なんで、そんな「旅」っていうほどのものじゃない。受注ゼロは一緒ですけどね）。

オカンに感謝した話でも。

僕は幼い頃から空手をやってたんですよ、そう5歳から。結構ちゃんと取り組んではいたんですけど、とにかく下手で弱い。

部活でも空手でも、そうだったんですけど、中2で170後半ありましたからガタイには恵まれていたと思います。

けど、全然自信が失くてね。何をするにしても言い訳や消極的なことばかり。

そんな中学2年の頃のお話です。

幼い頃から空手習ってきたものの、一向に試合に勝てない、一回戦負けばかり。

そのうち「一回戦負けが当たり前」、自分でもそんなふうに思っていました。負けグセがついてるっていうんですかね。

道場の後輩連中からもバカにされ（弱い先輩は先輩扱い出来ないわなあ）、同年からもバカにされ、相手にされず、ただ「昔からいるだけ」の人間でした。

えーと7月だったか8月だったか忘れちゃったけど夏休みだったと思います。

その年の夏に神戸だったか大阪だったか「花博」が開催されてたんですね。そこで僕が所属していた空手団体が大きな大会（ま、一応全国大会でした）並行して催す、ということで参加しないか？と声がかかりました。予選ナシでの全国大会でした。

参加費用がバス代やら宿泊代、花博チケット代やら食事代で一人4万ぐらいだったかな。結構な金額です。

下手な割には試合出るのは好きだったんで出たかったんですよ、ただ問題はその「費用」。元々、兄弟3人で空手を始めて、その時兄貴はもうやめてたけど、僕が出るということは自然と弟も出るということになります。そうなると8万円、大金です。

当時、親父は「日本に仕事がない」という理由で単身赴任で台湾に行ってたんですよ。

ただ変わってるのは親父の給料は親父の手元にあって日本の家族には一切送られてこない状態でした。

親父は親父で慣れないホテル暮らしと初の海外生活、日本人一人だけの現場なんで現地での付き合いや部下にメシおごったりで金要るもんだから致し方ないんですが、この時代が1番貧乏でしたね。

僕が中学・高校通ってた時代、僕も親に金貸してましたからね。

前から「金ない」とは聞いてはいたけど、今までとはレベルが違う。

ホントに余裕がないのがわかりました。

母親は夜遅くまで仕事で走り回って、家事は僕がやる。食卓にはカップラーメンのみなんて日もありました。

そんな状況なワケですから「8万」なんて金かかる大会に出たいなんて言えないし、強いならまだしも、劇的に下手で弱い僕ですからね、出るだけ金の無駄なんですよ。

出場断りの連絡をしなくてはいけないんだけど（本音では出たいもんで）言えない。

そんな日々が過ぎ、締め切りの日が近づいた夜、先生から電話がかかってきました。

「出るのか出ないのか、どっちだ？」と。

僕が電話をとり「いや、出たいんですけどお金ないんでやめようかと...」と言いかけた時、たまたま早くに帰宅して後ろで料理をしていた母親が「行ってきてええよ」と声をかけてきました。

僕は電話をそのままに「でも金ないやん。どうするん？」と聞くと「そんなもん、どうにかするから気にせんと行ってこればいい」という返事が返ってきました。

かなり嬉しかったのを覚えてます。今でも人生で1番母親に感謝した瞬間なんじゃないかな。僕は先生に「行きます」と伝え、電話を切りました。

オカンに感謝した話でも。2

そして、当日。

日程は一泊二日で、初日は花博、二日目は試合という日程でした。花博はあんまり覚えてません。

このときに撮った写真見てもあんまり楽しんでないのがわかります（笑）

二日目、いよいよ試合です。

出場するのは「形」といわれる演舞みたいなものと「組手」といわれる実戦です。

どちらかという組手よりは形のほうがまだ得意だったんですよね。痛くないし（笑）

午前中が形の部で組手は午後からです。形の試合は、それなりに大観衆（今思うとそんないなかったんだらうけど、当時はそう感じた）、大きな会場でやったことなかったんで、大緊張してしまい、いつもより出来が悪い。

あっという間に一回戦敗退。

悔しいやら情けないで涙浮かんできて。

形にカケてたんですよ。でも、その形はグダグダな内容になってしまった。

もう今回は望みが薄いと午前中はうなだれていました。なぜなら組手は今まで大会では勝ったことがなかったんですよね。

今までの試合で一回も勝ったことのない「組手」

それがこんな大きな舞台なら尚更勝てるわけないやんって。

午前中落ち込むだけ落ち込んだ僕は、午後になっても暗い表情のまま、組手選手入場のために整列していました。

中学二年の部、総勢64名、背番号2番で第1試合。

また緊張するシチュエーションです。整列しながら、ずっと自分を責め続けていました。

俺は何をしにきたんだ？

親にそんなに金使わせて神戸まで来て、何もせずに帰るの？

そんなのは情けないし、嫌だ。

もう腕折れてもいい、

足折れてもいい、

試合終わったあとなんかどうでもいい、

とにかくやれるだけやってやる。

このままじゃ母親に顔向けできない。

もう、ホント吹っ切れましたね。

「必死」「本気」「覚悟」「集中」が今まで足りなかったんでしょうね。

試合が始まりました。審判の号令とともに、相手めがけて突進しました、無我夢中で・・・。

・・・勝ちました。大きな大会では初めてでした。信じられなかったですね、「僕が勝つ」なんて。

2回戦。1回戦は勝てたものの、「勝てるのかなあ・・・」って。

でも弱気になっても仕方がないのでここでも1回戦目の気持ちを思い出して思い切って攻めていきました。結果、同点で延長戦先取り1本です。

審判の号令とともに突っ込みます。相手も突っ込んできます、ほぼ相打ちのような感じでお互い

に突きが当たりました。審判の「辞め」という号令で、自分の立ち位置まで戻ります。

ドキドキでしたね・・・審判は僕側の手を挙げ、僕の勝利を告げてくれました（赤いのが僕）。

自分で「自分が今置かれている状況が信じられない」という不思議な感覚でした。

9年間、ほぼ休むことなく練習してきたけど、一向に上達しない自分がいて、それが当たり前と受け入れてた僕。

その僕が2回戦まで突破。



3回戦。もう「無心」でした。とにかく「勝つ」、これしかない。

遮二無二攻めまくります。ストレートに延長ナシで勝ちました。

3回戦勝った時点で、一旦休憩が入りました。それまで集中していたせいか周りが全く見えてなくて、気づくとコートには8人しか残ってない。

足は床で擦れて水ぶくれ（火傷）になり、皮が破れて血が出てるし、両手両足のいたるところで突き指、打撲で青黒くなってました。同時に痛みまで出てきちゃって。

エンドルフィンじゃなくて、アドレナリン分泌してると（興奮と集中）ホント痛みとか感じないんですね。

4回戦、「我」に帰ってたのと、「ここまで来たらいいとこいっちゃうんじゃないの？」みたいな欲が出たんですかね、あっさり負けました（笑）

今までの自分が嘘のようにあっさり（笑）

「あーあ負けちゃった」という残念な気持ちもありましたけど、それ以上に「やりきった」という達成感と充実感がありましたね。

今までの試合では感じなかったものが。

試合終了後、審判及び主賓席前に呼ばれ、「敢闘賞」ということで「ベスト8」の小さいトロフィーと賞状をもらいました。初のトロフィーと賞状でした。

これによって道場で僕をバカにしていた後輩、同年、全員が僕を見る目が変わりました。

道場内でこの大会のトロフィーと賞状を取ったのが僕一人だったんですね。

「いつも入賞するような人間が取れなかったのに、アイツが取った」みたいな。

そして僕は「俺でも出来るんだ」と自信につながりました。

帰り道、途中のパーキングから母親に電話しました。嬉しくて嬉しくて。

興奮してたから何を話したか覚えてませんが、母親も喜んでくれたのを覚えています。

それ以来、「自信」がついた僕は入賞するようになり、地元の大会、地域の大会では優勝することも珍しくなくなりました。

寧ろ入賞しないことのほうが少なくなるぐらいに。

「自信＝自分を信じる」ことの大切さを知った一件でした。

この場合、9年間ほとんど休まず真剣に練習に打ち込んだ、その「練習量」が自信につながるというのを体験しました。

自分を信じるために常に、日々の努力研鑽を絶やさない。そして、それを実行できた自分を信じること。

ハンドボール

暑いですね。夏になりますね～（その前に梅雨来ますけど）。

あの突き刺すような日差し、肺の中まで熱くなるような熱気を感じるようになると「部活」を思い出します。

僕が通っていた中学は部活動の盛んな学校でして生徒は必ずどこかの部に在籍しなければいけませんでした。

小学生の頃はサッカー部でして、下手な割にスポーツ好きという人間だったので中学で「さあ、何をやろうかな(??)」と期待に胸膨らませてました。

空手部があれば空手部に入ったんでしょうが、生憎そんな部はなく、小学校の時にやってたサッカー部は「ヤンキーのたまり場」（ROOKIESみたいな感じ。ま、あんなかっこよくないですが）だったのと、僕をイジメた人間がいる、足が短くなるという親からのマイナスにより却下。幼馴染みが水泳部に入るとは言うけれど僕は泳げないので却下、といった感じでとにかく悩んでました。

父母ともに部活ではそれなりに活躍してたそう（テニス&バスケ）、消去法の結果、母がやってたバスケ部にでも入ろうかななんて思ってたところ、同じクラスの友人から

「まだ決まってないならハンドボール一緒にやらない？」

と声をかけられ、断る理由もないし、その友人は頭はいい、スポーツ万能、イケメンという三拍子揃った友人だったんで（クラスに一人ぐらいいはいますよねこーいうヤツ）「コイツがいるなら一緒にやってもいいかな」と思いハンドボール部に入部しました。

当時のハンドボールはあまりメジャーなスポーツではなく（今でもそうかもしれませんが、それでも宮崎大輔選手の活躍でかなり脚光浴びるようになったと思います）、僕もどんなスポーツなのか皆目検討つかない。

そしてウチのハンドボール部はまだ出来て2年目という新設部でコートはグラウンドの端っこで、コートとして使えるようにするために自分達で藁撒いたり、草抜いたり、平地になるよう土運んだり、そんなことからやりました。

ハンドボール部に入部するとまあ運が悪いのか縁があるのか、空手をやってる隣の小学校だった奴らもいる（僕は小1で転校してて、隣の小学校というのは転校する前にいた学校。空手はその小学校の体育館でやってて空手はそのままそっちで続けてた）。

またコイツらが僕は苦手（空手上手いし、強いし、明らかに僕に対して上からの物言いする輩で、で僕が空手もハンドも下手（というより運動自体苦手）でしょ？

バカにされる要素が増えるだけなんですよね。

ただ唯一の救いは僕を誘った友人の存在。

一年生ながら群を抜いて上手くて頭一つ抜けてたんですよ。

僕の中では「コイツがいれば大丈夫（味方がいる）」みたいな感覚だった。

そしたらその友人、一年生の夏休み中に隣の市に引越しちまって(^_^)

当然、友人は「転校」です。

僕がハンドボール部に入部したのも好きでもないのにやってたのもその友人がいたから（ま、お付き合い）。

ハンドボールやる理由失くなっちゃったんですよね。かといって今更転部もしたくないし、あの

怖い先生（ウチの中学で当時一・二を争うスパルタ教師）に「辞めたい」と言う勇気もない。
そのままダラダラと続けてました。

ハンドボール2

誘われるままに入部したはいいけど、やりたかったスポーツでもないし、誘った友人も転校しちゃった。

かといって転部も嫌だし、あの先生にそれを言うのも・・・って感じで「なんとなく続けてたハンドボール」。

ただ、「なんとなく」で続けてたのが、ある一件で変わることに。

意識が変わったのは一年の冬のこと。

毎年、ウチの中学は「校内マラソン大会」というものを冬にやるんですが、寒くなると部活でもその練習をするようになって、練習も走らされてばっかになるんですよね。

で、その練習で部活内の時久走をやった結果、僕は一年生の中でかなり下位になっちゃって。僕よりハンド下手な奴に負けちゃったんですよ。

それが悔しいやらショックやら。

「ハンドが下手で足も遅い、体力もない自分が許せない」

と自分に腹がたって仕方がない。

走るだけなら技術もいらない、連携プレイもない、要は根性だろ、ということで「持久走なら同学年の誰にも負けない」と決心してとにかく走りまわりました。

吐きそうになってもゴールしてから倒れてもいいから「誰にも負けたくない」と決めて、もう毎回全力、本気モード。

幸い身長あるので歩幅を大きくとって、「少しでも前に」って感じで走るようにしました。

そんなことやってたら、（翌月ぐらいかな）には部内の一年生ではトップになってました。これは嬉しくてね。

夜走ったり、部活終わってからも空手行ったりしてとにかく体力は負けねーぞ、と。

これで「ハンドは下手だけど持久走だけは早い」というポジションを掴み、何とか部内で自分の存在意義を確立することが出来ました。

2年生になり、先輩達が夏に引退されました。

比較的先輩たちとは仲良くさせてもらってたので「うるさいのがなくなった」とかはなかったんですけど、自分達が頑張る番だな、ぐらいの気持ちはありました。

が、なんせ技術的には全く上達してない。持久走は自信あるけど、それは「持久走以外は自信がない」ことの裏返し。

そして2年生になると同時に生まれる「後輩」という存在。これが厄介でねー。

弟の連れや近所のガキにまでバカにされて、空手でも後輩からバカにされてたんで「後輩の視線恐怖症」なんですよ。

今まではどんだけミスろうが下手だろうが、それは先輩と同学年の連中と比べられるだけ。

先輩より下手なのは当たり前、と自分で自分を納得させられるし、同学年にしても同じ。

ただし、後輩となると許せないんですよね（器小さいです、年下に負けるのは弟に負けるみたいで、自分の最期のプライドみたいなもん）。

それがより一層僕の気持ちを焦らせてね、「上手くやらないと、上手くやらないと」みたいな感じで。

当然、チームにも迷惑かけますからね。

更にもう一つ僕を焦らせるものが先生の目。

とにかく怖いんですよ。蹴る殴る当たり前でしたから。そして怒鳴る。もうビクビクしてました、毎日。

僕が当時、どんな状態だったかというと、

部内の同学年では1番背が高い（つまり有利）

けど自信がない（失敗が怖い、先生の目が怖い）

レギュラーには入れず背番号は8番（ハンドは7人のスポーツ）

レギュラーに何かあれば自分が最初に呼ばれる

本音はミスが怖いので試合に出たくない

試合に出ると消極的なプレイ

先生の顔をチラ見して反応を見る（顔色を窺う）→先生のシャクに障る

呼ばれてピンタ若しくは蹴り

試合後（最悪試合中に）「おみゃーはアホかあつ、もう応援もせんでええ、ずっと走っとれー」です。

先生の名誉のために言うのですが別に暴力教師ではないんですよ（気は短いですけど）。

僕は部内の2年生では1番背が高かったし、体力もある、8番にいたのも「期待」の顕れだったんですよ。

で、その期待を毎回裏切るわけですから(^_^;)（そりゃ怒るわなあ）

僕もその期待には応えたいけどどうしたらよかったのか「正解」がわからないんですよ。

その結果「おみゃ〜こっちこい→ドカツ」です。後輩それみて憐れみの顔。同学年の奴らは「またか」です。

毎回ではないにしろほとんどこんな感じ。

公式戦はほとんど出してもらうことなく（練習試合でこれやってたらそりゃ危なっかしくて出せないわな）、こんな感じで3年生になってしまいました。

ハンドボール3

相変わらずハンドは「これ」といって上達もせず、消極的なプレーをしてしまうことから先生の怒りを買ひ、すっかり自分に自信を失くしてしまってる僕。

嘲笑の対象とされ、後輩からもバカにされ、遂に最後の年、3年生に。

3年生になり、弟及び弟の連れ、空手の後輩など顔見知りの多くがハンド部に入部してきました。

いよいよもって「みっともないところ」は見せらんない。と、気持ちは逸るけど一向に変わらない技術。

こうなるともう諦め入るんですよ。

空手も部活も練習休まず一所懸命にやってるのに全然上達しない（空手は入賞するようにはなっ
て自信ついてたけど）。

だから試合出る気もないし、「夏が最期だから、それにむけて猛練習してる。邪魔しないように
しよ」てなもんです。

先輩達はそこそこ強かったのに僕らはたまに入賞する程度だったんで最期の公式戦である「郡
大会」（全知多半島）には絶対入賞するぞと気合い入ってました。

そんな最中、何とキャプテンが怪我をしてしまいました。

「技術」の時間中にパンチで切った金属片が目に入り目を傷つけてしまい目が開けられない状
況に。これはチームにとってはかなりの痛手。

当時、1番上手いからキャプテンになってた彼がいなくなり、その代わりとなってレギュラーにな
ったのが僕。

周りも「え〜っ（絶望的）」だし僕も「え〜（絶望的）」です。

けどそんなことも言ってらんないとレギュラーに混じっての練習を始めました。責任重大です。
そしてたいして上達しないまま大会を翌月に控えた（今ぐらいの時期っすね）頃、今度は僕が利
き腕を怪我しました。

虫に刺されたかなんかわかりませんが痒いのでかいてたら雑菌でも入ったんですかね、傷口化膿
しちゃって。

でも周りに迷惑かけたくないし、母親も毎日遅くまで仕事してる（この辺りは[記録しておきたい
記憶vol.04](#)を参照）、お金ないし自分で治そうとしたんですよ。

コンパスの針をライターで焼いて傷口に指して傷口開いて膿出したり、消毒液かけたりして。
ま、当然治るわけでもなくますますひどくなるばかりで、右腕全体が腫れ上がり指先から腕の根
本まで熱持って体温まで上がってきた始末。

それでも「怪我したので休みます」なんて言うのが怖くて、それに僕以外の控えはみんな背が低
いのでキャプテンと同じポジションは務まらない。

だから何としてでも今度の大会には出なきゃいけない、と思ってたんで「たいした怪我じゃない
」ということをアピールするためにも筋トレとかやってみました。

日に日に腫れあがる腕、腕が腫れすぎてカッターシャツの袖がピチピチになってる状態。

ある日、見るに見かねて母親がいきなり学校まで押しかけ僕は無理矢理病院に連れてかれること
になりました。

病院に到着し診察してもらおうと「こりゃ酷いね。もう少しで腕落とさなきゃいけなかったよ」と

。それほど酷かったようです。

傷口は異臭を放ち、医者が腕を絞るとその下に置いてあるトレイにボタボタと大量の血膿が落ちます。トレイ受けてる看護婦さんも目を背ける。そんな酷いんだ、これ。

で、この治療がまた痛いんですよ。

どんな治療するかっていうと、肘上5cmくらいの場所に傷口あったんですけど、そこから20cmくらいの消毒液に浸したガーゼを鉄の棒でぐいぐい押し込んでいくんです。

そうやって膿の通り道を作ってるのかわかんないですけど、下に向けて押し込んで、翌日の診療のとき、それをズルズル〜っと引っ張り出すと、膿と血だらけのガーゼが出てきて、更に腕を絞って中身を搾り出す。

激痛です。そして抗生物質と点滴の毎日。

おかげさまで、治りは早かったですけどね。10日間ぐらいで腫れも引いて普通に動くようになったんじゃないかな。

そして腕も太くなったんで（怪我と筋トレのおかげ）、シュート力も高まって、自分なりにいい感じに仕上がってました。

ハンドボール4

右腕も完治し、仕上げはいよいよ最終段階。

僕を交えた連携の練習もしたし、みんなの気持ちも一つになって、あとは大会当日を待つばかり、という一週間前、また悲劇は起きたんです。

右腕が完治し、あと一週間で大会という日に左膝を虫に刺されました。

体内の毒素が強い、っていうんですかね。右腕のときのように今度は左膝が腫れてきたんですよ。しかも膝が曲がらないぐらいに。

こんな大事な時期に……。今度はすぐ病院に行って治療。またその間は筋トレです。

昔から皮膚が弱くて、蚊に刺されると必ず水ぶくれになり、幼い頃は頭皮を掻きすぎて枕が血で真っ赤になってたらしく、このやるせない怒りを親にぶつけたことがありました。

兄弟3人いて僕だけがこんな体質なんです。

すると母親も父親（たまたま帰国していた）も共に「俺（私）のせいだ」とお互いに自分を責める始末。

子供ながらに「言っではいけない一言だったなあ」と反省しました。

今回はすぐ病院行ったのもあって試合当日には何とか膝は動くようになってました。腫れてはいましたけどね。

ハンドボールはジャンプしてシュートを打つことが多いのですが、右腕が利き腕だった場合、ジャンプする軸足は左足。

つまり僕は利き腕の肘と軸足の膝を怪我したという、なんとも運の悪い怪我をしたんですよ。

試合会場に到着し、ユニフォームに着替え、軽くアップをします。

控え室でユニフォームに着替えてる間、仲間からある話を聞きました。

それは今回怪我で出られなくなったキャプテンの話。

キャプテンには「キャプテンマーク」というバンドが渡されていて、それを持つことはある種ステータスでもあるわけです。

その「キャプテンマーク」をキャプテンが返した、という話でした。

大会前にキャプテンは先生のもとへいき、

「大事な大会前に自分の不注意からメンバー全員に迷惑をかけてしまい、僕は試合にも練習にも参加できなくなってしまった。キャプテンとしては失格です。だからこれは僕が持つことは出来ません。」と。

これ聞いて、みんな燃えました。

「アイツのためにもやるぞ」と。みんなキャプテン責める気持ちなんて全くなかったんですよ。なのに、一人で責任感じてやがって（泣）

アップを済ませ、先生のもとに集まり、今日の作戦会議です。

「ええか、ムツ（僕の呼び名）は相手がロングシュートを打ってきたら前に飛び出してとにかくジャンプしろ。とにかくそれだけ。あとは他のやつらに任せろ」

指示はそれだけ。

さすが、先生。今更あーだこーだ指示出しても僕が動けないのをよく分かってらっしゃる。

そんだけなら僕でも出来るし分かりやすい。要はロングシュートのコースを潰してしまえばいいわけだ。僕がブロックしてこぼれ玉を拾ってカウンター、これが基本戦略でした。

円陣を組み、キャプテンが声をかけます。

「みんな、ごめん。俺が怪我したせいで迷惑かけちゃって。外から精一杯声だしして指示出すよ。みんなならぜって一勝てるから、いくぞーっ!!」

「オーッ!!」

さっき控え室で聞いた話のあとですからね、更に火が点きました。

ハンドボール5

いよいよ、試合が始まる。キャプテンの無念とその覚悟を聞かされたメンバーは否が応にも火が点いている。

これでやらなきゃ男じゃないし、今までの全てをぶつけて全て出し切る。

1回戦の相手はO中といい、レギュラーなら普通にやれば勝てる、というチーム。

しかし、全体的に背が高いチーム（僕よりは低いですけど）でウチは全体的に背が低いチームだもんでロングシュートがはまると危険。それに今回は「僕」がいる時点でレギュラーメンバーじゃない。

試合開始の笛が鳴る。

確か後攻だったけ。相手がボール回しをして切り込んできた、すかさず僕が前に詰めながらジャンプをする

「バシッ!!」

手に痛みが走る。

そのボールを仲間が拾い、カウンターでサイドから攻め上がりシュート・・・こちらが先に点を取得した。

気分的にも初得点を決めたチームの方が余裕が持てるし、「この試合イケる」と思い込めるんですよね。

「言われたとおりに出来た・・・」

点を取った喜びもありましたが、それ以上に嬉しかったのが言われたとおりに動いて、自分が動いた結果がシュートにつながった、ということ。

これが嬉しくて、嬉しくて。

試合に集中もしてたんでしょよね、ミスをして怒られることなく（恐らく積極的に動いていたから）、そしてディフェンスではブロックをしてといった感じで。

前後半通してこちらがリードしてました。そして笛が鳴ります。

「ピピーッ!! 試合終了」

勝ちました。

レギュラーに混じって出た試合で公式戦初勝利でした。

試合が終わり互いのベンチに礼をして、自軍のベンチにも礼をしたら涙が溢れちゃって（泣）自分が怒られず、怒鳴られず最後まで試合に出れたこと、勝てたこと、言われたとおりのことが出来たこと、何か嬉しくてたまらなくて泣いちゃったんですよ。

それ見た仲間からは

「お前、まだ1回戦勝っただけじゃねーか。何泣いてんだよ」

とからかわれる始末。まだ1回戦勝っただけで、このあともあるのは自分でもわかってましたけど、泣いちゃったんですよ。

御子柴君みたいな号泣ではないですけど、御子柴君が泣いて、それを仲間がからかう、絵的にはあんな感じです（だからROOKIESハマってしまうんですよ）。

少し、自分のプレーに自信がついた僕でした。そしてこのあとの2回戦で事件が起きます。

ハンドボール6

1回戦を突破し、2回戦へ。

初めて怒られない試合を展開出来た僕は最後の大会でやっと自分のスタイルや「自信」を見つけることが出来た。

今までの練習は無駄じゃなかったんだ、なんて思いつつ、少し舞い上がった自分を戒め、2回戦に向けて準備をする。

2回戦の相手はY中（うちもY中だけど）。

全体的に高さはないけどスピードがあって、連携やサイドからの攻撃、ミドルレンジからのクイックが多くて、結構厄介な相手。

レギュラーフル出場でも勝ったり負けたりの互角の相手。

しかもこの攻撃パターンがウチと一緒に（いや、僕が活躍するような選手だったらもっと攻撃パターン広がったんですよ。でも活躍しなかったんで・・・）だもんで、やり辛いですよね、僕としては。

更にやり辛いというか、苦手意識があったもんだからこの学校と試合すると消極的な部分に更に磨きがかかり、ほんと動けなくなるんですよ。

過去、先生に殴られた蹴られた試合のほとんどはここが対戦相手のときばかり。罵声・怒号の嵐。だから大嫌いな相手でね～（^^；）

トーナメント表見て「うわぁ～Y中だよ・・・」なんてマイナスにもなったけど「いやいや、俺は出来るんだから。」と必死に自分に言い聞かせる。

試合の直前になり、作戦会議。

僕への指示は1回戦と同じ「お前の上から打たすな。」これひとつ。

相手はさっきのO中に比べて身長がないのでさっきより止めやすいはず、そして背が低い分、こちらのロングシュートは入る、今までの僕は「ノーマーク選手」なんでY中からしたら「アイツはチョロい」ですからね（だって、そこのY中の監督に敵ながらダメすぎて怒られたぐらいだもん、俺）。

なら見返してやろうじゃないの（笑）

試合開始。

今度は先攻だったかな。

ボール回して、味方が切り込みディフェンスをブロック、そして僕にパスが回ってきたのでそのブロックの上から高く飛んで思い切りシュート!!

入りました。

挨拶代わりにロング行かせていただきました（そういや書いてて思い出した。先攻だった場合、最初の一発目はロングシュートでいただくって先輩たちのセオリーだったんですよね）。

ハンドボールはゴールから6mのラインにディフェンスがいて、その前に点線で9mと呼ばれるラインが引かれています。

ロングは大体その位置から後ろで打つんですよ。

ロングシュートが決まるとすごい気持ちいいんですよね。

その高い打点から一気に真下へ振り下ろしたりキーパーの動き見て、引っ張ったり、流したり。

これがキレイに決まると「スカッ」とします。



先制点をいただいたので、今度は守備です。

守備は1回戦で要領を得てるし、とにかく自分の前方でボールを持った人間がコチラに向かってきたら間を詰めるなり飛んでブロックすればいい、あとは後ろの仲間に任せればいい。

全員守備は他の学校の選手に比べても上手いですから安心して前に詰めることができます。

相手が適当にボールを回したあと、切り込んできました。

何回か戦ってる相手ですからね、誰がミドルを打ってくるぐらいはわかります。相手がシュート体勢に入ったとたん僕は手を伸ばし高くジャンプ・・・

手に当たりました。

すかさず、そのボールを味方が拾い上げ、速攻で点を入れます。今回も作戦成功です。

寧ろ1回戦より、相手の高さが無いぶん、上手くいってます。



このパターンに自信を持ち、「相手がY中でもこれならイケる」と確信した僕はどんどん前に詰めていきます。

途中、勢いよく前に出すぎて反則を取られ、2回ほど退場は受けましたが、これは僕が積極的に動いて相手のシュートチャンスをちゃんと潰してるからなんで、一切怒られることはなく、その退場している間に指示を聞いたり、少し休憩したりしてました。



怒られることはなかったんですけど、今までシュートチャンスを潰してた人間がいなくなったので、そこから打たれるんですよねミドルを。

そうすると折角開いてた点差が徐々に縮まっちゃって。

退場処分の時間（確か1分半だけ？）が過ぎるとその点差を元に戻すべく、ロング打ったり、潰したり。

笛が鳴り、勝ち越した状態で前半を終えました。

ハンドボール7

2回戦、苦手なY中相手に（自分で言ってしまうけど）活躍し、それなりに貢献し（これも自分で言ってしまうけど）、チームのキーマンになってた僕。

「この点差を守っていけば」、とかは思わず、「更に点差開けてもっと活躍してやる」と意気込んでいたところに、悲劇が訪れ、あっという間に終幕を迎えることに……。

休憩しながら、ブロックでボコボコになった腕を冷やします。

前半、ほとんどキーパーまでシュート届いてませんからね。ほとんど僕が止めてます。そのぐらいドンピシャな作戦だったんですよ。

先生も仲間も「イケる」と感じてたと思います。ウチの誰もが「勝てる」と。僕も後半は更に止めてやると息巻いてました。

後半が始まり、前半と同じように動き回り、相手のシュートチャンスを潰します。

そしてシュートを決めて、声を出し、お互いがお互いに声を掛け合い、注意をし合って、チームが最高の状態で盛り上がってます。

今までオドオドしてた僕はもう、そこにはいません。（偉そうに）仲間に注意してる僕がいました。

後半入って5分過ぎぐらいでしょうか、相手チームが同じように切り込んできたので思い切り前に詰めたら相手チームの選手も僕も衝撃で倒れました。

「やった、相手のチャージでこちらのボールだ」と思ったんですが、その反則を知らせる笛のあとに続いた審判の声に自分の耳を疑いました。

「8番、失格」

僕は「え？」って感じで状況がよく飲み込めてない。

僕の感覚では今のは相手のチャージであって、こっちのボールになったと思ってただけに余計に状況が飲み込めない。

仲間も相手チームですらも状況が飲み込めない。

審判が何を言っているのかわからない僕はボールを持ったまま、ただ呆然と立ち尽くしてました。

「え？シッカクって？失格？誰が？しっかくって？何を言ってるんだ……？」

とパニックに。

すると僕が意味がわかってない、と気づいた先生から

「ムツ、いいからこっち戻ってこい!!」

と呼ばれ、ボールを置いてベンチへ。

僕の変わりに控えの人間がコートに入りました。

意味のわからない僕は先生に「失格ってなんですか？」と聞いてみると、先生は顔はこちらに向けられないものの、穏やかに

「ハンドボールってのは3回退場すると失格になって、その大会にはもう出れないんだ。」

と告げられ、やっと状況を飲み込んだ僕はその場に膝から崩れ落ちました。

取り返しのつかない大失態と、悔しさ、もうコートに戻れない悲しさ、そして多大な迷惑……自分を責める気持ちや感情が一斉に溢れ、涙がとめどなく溢れてきました。

すぐさま立って、先生に、「すいませんでした。僕のせいで、僕が、僕が……」

言葉になりません。

とにかく申し訳ない気持ちでいっぱい何で何を謝っていいのかわからないけど、自分がいなくなったことでチームがピンチになってるのは前半の退場時でわかる。

とにかく謝って済む問題じゃないけど、謝らずにはられない。

「すみません、すみません。いったい僕はどうすればいいですか（許してもらえますか）？」

と謝り続ける僕。

どんな罵声も怒号も蹴りも、どんな罰も受けるつもりで覚悟していました。

先生は穏やかに笑いながら

「ムツよ、お前は今までの3年間で一番いい動きをして、文句のない、いいプレーをしていた。失格には驚いたけどな（笑）怒ることなんて何もないよ。お前は頑張った、よくやったよ。今、お前がすべきことは謝ることで泣くことでなくて、今コートにいるアイツらを応援することちゃうか？」

と僕に向かって話してくれました。

先生からこんな温かい言葉をもらったのは初めてでした。

そして近くにいてこの光景を見てた普段は僕をバカにしてる後輩達も

「そうだよ、先輩。先輩の今日の前半のスコア知ってる？チームで一番点を取ってるし、一番シュート止めてるんだよ。今までで一番すごい試合だったよ。マジ俺ら感動したって、すげーよ!!」

と、後輩も涙流しながら声をかけてくれました。

キツイ、厳しい一言だったら良かったんですけどね、こんな言葉をかけられると却って涙止まらないです。

僕は涙を拭き、精一杯声を出して応援を続けました。

声が掠れて出なくなるぐらいに必死に。注意を呼びかけ、盛り上げ、応援し、声を出し続けます。

しかし、僕がいなくなったことによって、今までブロックしてた部分からシュートを入れられるようになり点差は縮まり、遂に逆転。

自分があそこになれば、あんなシュート入れさせないのに・・・と点を入れられるたびに、胸が痛みます。

仲間も頑張って取られた点を取り返しには行きますが、キャプテンと僕がいなかった時点でロングを打てる人間がいなくて、攻撃が単調になりどうしても点が入りづらくなってきてます。

笛が鳴りました。

2点差で僕らが負けました。

またその点差も「僕が失格になってなければ・・・」と胸が痛みます。

ベンチに戻ってくる仲間に大声で謝ります。申し訳ない気持ちで涙が溢れます。

「ごめん、俺が抜けたから・・・、俺のせいで・・・」

「バーカ、お前の責任じゃねえよ。お前、めっちゃめっちゃ活躍したじゃねえか。大体、今までのお前に比べたら上出来だよ。気にすんな。しゃーないわ。」

とあっさり。

一緒に闘ってきた人間だからてっきり文句の一つでも出るかと思ったんだけど、仲間から出てきた言葉はあっさりこんな感じ。

ちょっと拍子抜けしちゃいました。

僕らの夏は終わりました。

辛く苦しい3年間でしたが、迷惑かけながらもとてもいい思い出と財産をもらった中学の部活でした。

試合を終えたあとに撮った記念写真はすぐ出せる場所にしまっており、たま〜にその写真見えます。

そして「ハンドボール部でよかったな」と思います。

初めは「なんとなく」でやってた部活だったけど、仲間に恵まれて、厳しかったけど「恩師」と呼べる先生に出会い、「自信」をもらいました。

なんだかんだ言って一番楽しかったし、強烈な印象の残ってる思い出です。そして息子に自慢できる数少ない思い出です。

暑いので涼しくなる話でも。

17歳になる年の夏。

その年は「冷夏」で太陽の少ない夏でした。

日照時間が短くて野菜や米が不作で、その時はタイ米の輸入とかがニュースで騒がれていたかな、と。

学校のグラウンドがまともに使えず、部活の練習が思いっきり出来なくてとても悔しかったですね。

そんなことからこの「僕が17歳になる夏休み」は思い出のある夏休みなんですが、もう一つ起きた「現象」もあって特に忘れられない夏になりました。

毎年夏になると叔母の家に避暑兼ねて遊びに行ってたんですよ。

叔母の家は山の麓にあって夏でも朝夕は涼しく、高校生になってからは小学生のイトコの勉強みたり、その家の手伝い、叔母の仕事の手伝いなんかと「アルバイト」のため長逗留してました。その日も朝から叔母の仕事を手伝い、予定より少し早めに仕事が終わりました。そこで時期もちょうどお盆だったため叔母と一緒に墓参りに行くことに。

墓は集団墓地（霊園とは呼べないなあ）の入口近くにある比較的密集してる場所にあります。

いつも通りに墓に水をかけ、線香を焚き、花を指し、お参りをしました。

その墓は母方の親族が眠る墓でして母方の祖母と幼くして亡くなった母の妹、祖父の兄が眠っています（他にもいるんだろうけど知らない）。

一通りお参りを済ませ草を抜いたり、包み紙などを片付けたりしてる時に、ふと隣の墓石に足が当たりました。まあわざと蹴ったわけでもないんで気にも止めずそのまま帰ってきたんです。帰ってから普通にメシ食ってのんびりして23時ぐらいかな、明日も朝から仕事があるので早めに床につきました。

僕が寝ていたのは仏間の縁側。そこが1番涼しいのでそこに布団敷いて寝てました。

どれぐらい経ったのか、完全に眠っていたんですが、ふと腹の辺りに重みを感じるようになりました。

そんな潰れてしまうような重みではなく小学生が座ってるぐらいの重みっていうんですかね。僕も結構体格いいほうなんで、そんなキツイ重さには感じませんでした、「誰か乗っているな」と。

その家には当時8歳になる従兄弟がいて、年の割に小さくイタズラ好きで、てっきりその子が夜中にトイレかなんかで起きてきて、僕にちょっかいかけてきたと思ったんですよ。

「しゃあないやっちなあ〜」なんて思いながら眠たかったんでそのまま寝たフリ決めてやり過ごすことにしたんですよ。そのうち諦めるやろ、と。

そうこうしてるうちに今度は胸の辺りが重たくなってきて。

「しつこいなあ〜」なんて思いながらもこっちもそのまま寝たフリして、しつこい従兄弟に腹立てながら「早く寝ろよ」などとイライラしていました。

すると、いきなり首を絞めてきたんですよ。

握ってるとか触ってるというレベルじゃない、完全に絞めにきてる。

さすがにこれは「イタズラが過ぎる、怒らなあかん」と、僕の首を絞めている手を払い除けよう

とした時、自分の体が金縛りで動かないことに気がつきました。

「あれ？動かない。なんで？」

と頭ん中パニックです。

必死にもがきますが指一本動きません。そうこうしてるうちに首を絞める力はドンドン強くなり息が出来ないようになりました。

益々パニックになり、わけがわからなくなる僕。

完全に「もうヤバイ」と、今何が起きているのかを確認するため思い切って目を開けました…。

目を開けたそこには、青白い顔をした老人がものすごい形相で僕の首を絞めてました。

表情は怒り憎しみで目が吊り上がり、「憤怒」の表情というんですかね、僕を睨めつけながら「死ね～死ね～」と呟いています。

何故、じいさんが僕の首を絞めているのか、状況は把握出来ないけど、とにかくこのままではマズイので何とか体が動かないかと色々もがきますが首も手も足も動かない、助けを呼ぼうとしても声が出ないというか口が開かない。

とにかく頭のなかで「どけ！やめろ！消えろ！」などと念じながら、気持ち折れたら死ぬかもしれない、と何故か感じていたので、心を強く保つために必死に念じてました。

僕はそのまま気を失ってしまったようで気が付いたら朝でした。

周りを見渡してみると、何も変わらない。争ったあともないし、窓には鍵がかかったまま。

叔母が既に起きて朝食の用意をしていたので、台所へ行き、昨夜の顛末を話してみました。

「もしかしたら信じてもらえないかな～」と思いながら話したんですが、一通り話し終わると叔母が

「私もな夢に伯父さん（墓に入ってた祖父の兄）が出てきたんよ。夕暮れ時に坂の上におってな、私が子供で伯父さんのあとをついて歩いてたんよ。もしかして墓参りに行ったときに一緒に（伯父さんと他の霊が）憑いてきちゃったのかもな」と。

そう聞いてピンと来たのが「足が当たった墓」。

多少罪悪感があったのか僕にはその墓の主が懲らしめるために一緒に来たのではないかと咄嗟に感じました。

それからというもの墓参りに行くと絶対に墓石に当たったりしないようにもんのすごく注意しています。もう、あんな怖い思いしたくないんで。

そういえば去年墓参りした時、墓参りに行ったことは親には言ってなかったのに母親から電話が鳴り「墓参り行っててくれたんやなあ～かあちゃん（母の母）夢のなかで喜んでたわ」と伝えられました（これはこれで怖い）。

信じるも信じないも自由です。僕もあまり信じない夕子なんで。

ま、夏なんで涼しくなってもらおうということで人生最初で最後（であってほしい）心霊体験でした。

4年前の夏の出来ごと

4年前の夏の出来ごと（[壮天航路](#)より転載、加筆）

2005年の12月のある日のこと。「仕事終わったら連絡して」と嫁さんからメール。

「メールじゃあかんの？」と返信したら「電話で話したい」と。

もう、ドキドキですよ。普段、そんなこと言わない嫁さんだけに「えっ？何があったんやろ？」と別に悪いことはしてないですけど・・・。

電話してみると「妊娠したかも・・・」と。

正直、嬉しいという気持ちより先に「ヤバイ」という感情が先に出ましたね。

忙しくなる、共働きが出来なくなるので金がいる、とかね。

とにかくその場はそんな感じで急いで家帰って今後のこと話し合っ、ひとまず病院行って検査しよう、と。

その翌日、病院行って検査してもらおうと嫁が「妊娠してるかもって」と。

この時は素直に喜べましたね、同時にドキドキとワクワクでしたけど。

そして2日か3日したら「出血した」とメールが来て「流産かも・・・」なんて言われて救急で病院運んで。さむ〜い12月。

とにかく風邪ひかせちゃいけないし、つわりもけっこうひどくてメシが食えない、仕事も急には辞めれないけど仕事行ける状態でもなかったからほんと寝たきりで。

確か1〜2週間はほとんどベッドの上において、そのまま年も明けてしまったような。

早いもんですよ。

会えるのは10ヶ月も先かぁなんて言ってたらこの前（8/13）に産まれました。

予定日が9日で「初産だから遅れやすいよ」なんて聞いてて、あんまり遅れすぎるとデカくなりすぎちゃうなぁなんて心配もしてました。

何せ、嫁さん身長160あるかないかでガリガリ。それに比べて僕は身長183.5cmありますからね。腹はでかくなって子供もでかくなってるのに嫁さん体重変わらない。病院でも「吸収率が良すぎるよ」なんて驚かれてました。だもんで嫁さん足とか痩せてまって・・・。

そして盆休み突入の朝、嫁さんがバタバタ動いて「陣痛来たから起きて!!」って怒られて急いで準備して病院へ。

病院着いたら「一時的なものだから一旦帰って様子見て」なんて言われてトボトボ家帰る。

でもいつ来るかわかんないので家でひたすら待ってたら夕方頃から嫁さんの様子がだんだん悪くなってきて・・・夜8時ぐらいには「痛い」を連発。

なんでも陣痛の間隔を計らなければいけないらしく、それを測ってたんですけどね、あまりにも痛がってるので病院に電話させて報告したら「来てください」ということでそのまま分娩室へ。

病室が空いてないのもあってそのままそこで待機することになりました。

時間は21時半。そして先生来て軽く診察。

「朝方ぐらいまではかかるかなあ〜」なんて言われて嫁も「朝まで頑張るしかないね」なんて覚悟決めてました。

家族からは「産まれたらすぐ連絡ちょうだい」なんて言われてましたけど、朝まで起きて待っててもなあ〜なんて思ったんで

「朝までかかるから寝てて」とメール。

いきなり分娩室に放り込まれたもんだから何も準備してきてないし（嫁さんは出産用のグッズとかは準備してましたけど）、その病院、夜は赤外線センサーで機械警備入ってるもんだから夜22時以降は部屋から出ないでください、と。

えーっ!!ドリンクやタバコもムリ?

しかも強制立ち会いじゃん（僕も嫁さんも別に立ち会っても立ち会わなくてもどっちでもよかった）。

テレビの影響が強くて「部屋の外で落ち着かずにタバコ吸ってる父親が子供の泣き声とともにタバコを急いで消して病室から出てくる先生に『元気な男の子ですよ』なんて言われる」のをイメージしてたもんだから・・・。

そんな話しをしながら分娩室のテレビで「エンタの神様」見てました。

嫁さんはお笑い好きだから多少はリラックスするかな〜なんて思ってテレビつけたけど、そんな余裕ないようで芸人見て笑ってる僕に対してイライラ。

とにかく腰が痛いようで腰をさすったり、叩いたりしてたんですけどその間隔が短いので眠たくても寝れない、でも部屋にはクラシック流れててもう眠くてたまらない。

「朝までこの状態?マジかよ〜」なんて半泣き状態でしたけど12時ぐらいに出血しだして助産婦さんが「もうすぐ破水するかな」なんて。

夜中の1時ぐらいに点滴やりだして嫁さんイキミ始める。

助産婦さんのアドバイス聞きながら結構上手にやってましたね。褒められてました。

んで僕はというと慌てもせず、嫁さんの手握って、汗ふいたり、呼吸のリズム狂ったりしたら「リズム合っていないぞ」てな感じで冷静だった気がする（ホントは焦ったり、慌てたりしたほうが微笑ましいし、面白いんだろうけど・・・）。

2時14分、産まれました。

男の子で2898gで身長51.5cm細長い子が出てきました。

産まれる2ヶ月前から耳が発達してくると聞いてたのもう名前決めて呼びかけてましたから、即座に名前呼びました。

「おーお前がつかさかあ〜」なんて。

ソッコーで写メ撮って家族や友人、先輩後輩にメール。時間は深夜でしたけどね、盆休みやし、

土曜の夜やからまあいいや、みたいな感じで。

もう嫁さんほったらかしで、子供ばっか見てました（ま、グッタリしてたし）。

翌日、嫁さんからでた一言は「あんたには労りのココロはないのかい!!」と怒られました。いや～だっていっちょまえにあくびはするは屁はするわ、爪も伸びてるし、くしゃみもするもんで面白くて（笑）でも、俺が抱くと必ず泣くんだよね(^^)